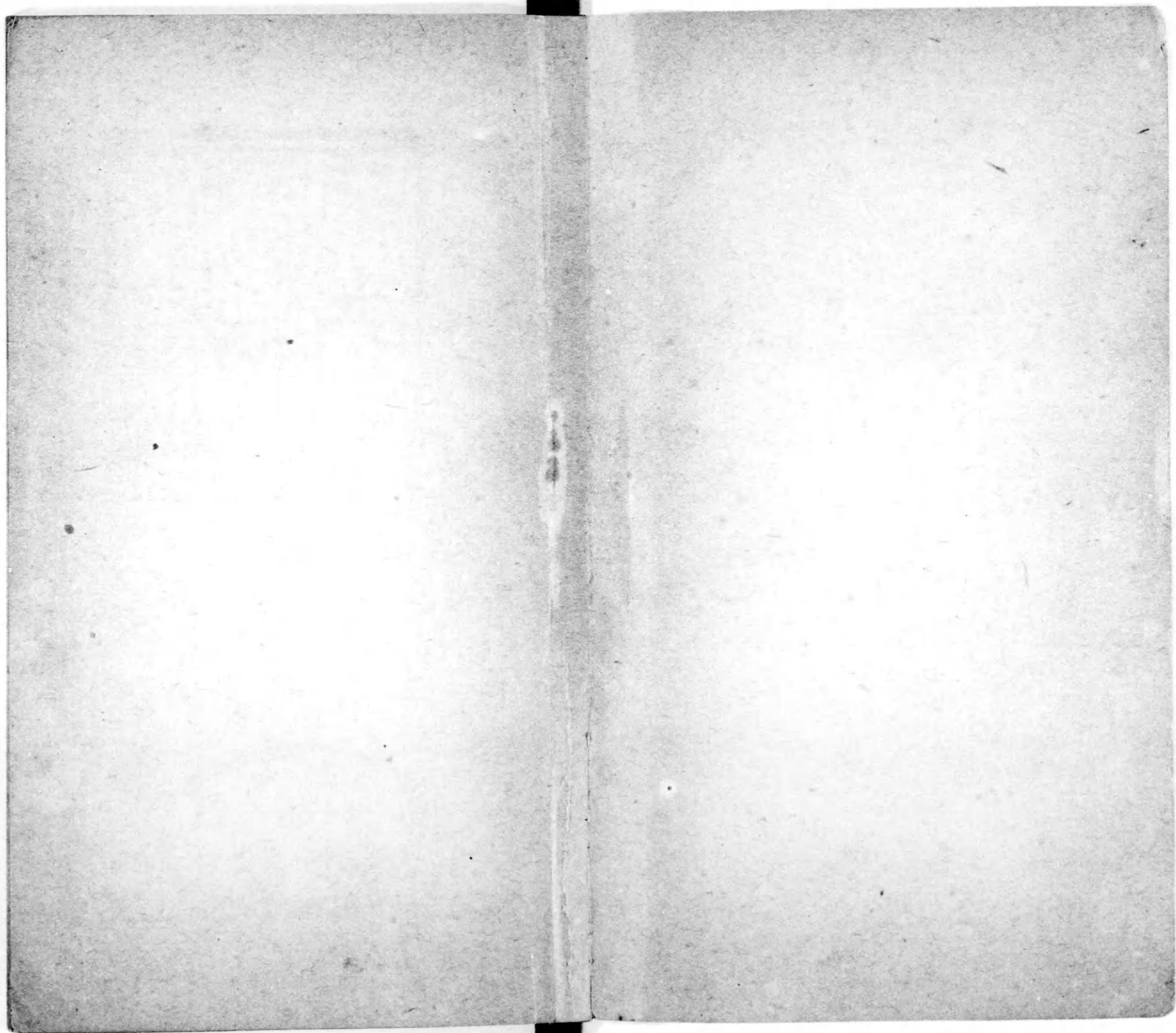


始



Handwritten text in a cursive script, likely a title or author's name, written vertically on the light-colored section of the book cover.





特100
391

糸
春水著

な
さ
け
を
賣
る
女

東
京
近
松
書
店

大正
4.18
内交

目次

朝顔の鉢……吉原遊廊

□夏の朝飯……………

一

□羽衣花魁は……………

四

□夏の朝の気分……………

八

□揚巻花魁が……………

一

雇仲居の千賀子

□初夏の夜 ……やとな……………

一八

□夜の小屋……………

二三

- 彼女の身の上……………二六
- 東京！FOCKIOI……………二九
- やどな俱樂部創立……………三二
- 妾の行く可き途……………三五

柳散るころ(柳新町)……………日本橋郡代

- 曉方の秋さめ……………三九
- おきちとおりん……………四六
- 秋さめの午晝……………四九
- 秋さめに暮れる午後……………五六
- お銚子を取り出して……………五九

貴婦人おきん……………濱町高等内侍

- 夕月が柳の髪にかかる頃……………六八
- 千ちゃんの「挿話」(エピソード)……………七二
- 百夜通ひ……………七六
- 天災相場……………八二
- 日光へ、中禪寺湖々畔へ……………八五
- 紅葉を見に……………九〇
- 小西の本店と別館へ……………九三
- 湖畔に立つて……………一〇〇
- 自分と云ふものは……………一〇七
- 金鶴香水の匂ひが……………一二二
- 第一歩……………一一九

妾たちの生活……………淺草千束町

- 観音さまのうしろで……………一三二
- 象潟署の御取締の下で……………一二四
- 夢は何處を宿るらん……………一二六
- 代表的私娼窟の一人……………一二七
- 一大鐵槌投下さる……………一二九
- 私娼を女土工とせよ……………一三一
- その昔は女郎とした……………一三二
- 散娼があらはれた……………一三四
- 白首の親はどんな親か……………一三七
- 多少教育あるのもある……………一三九
- 御客大明神……………一四三
- 収入の多いときには……………一四六

- 家賃は三十圓以上……………一四七
- 早く恚んな場所を毀せよ……………一四八

なさけを賣る女

- 何故公娼と私娼存在するや……………一四九
- 家康の社會政策……………一五二
- 身賣は婦徳なり……………一五五
- 大正の今日……………一五九
- 私娼撲滅の本義……………一六二
- 公娼と私娼の解決……………一六四

私娼全滅

- 隠賣女の召捕……………一六六
- 私娼退治案とは……………一六八
- 新規はいかぬ……………一七二
- 營業の讓渡に依る名義の變更許さず……………一七三
- 前營業主の轉業又は死亡は廢業と見做す……………一七五
- 新たに雇女を雇ふことを許さざる事……………一七六
- 雇女の通勤許さず……………一七七
- 學生生徒の遊興を禁ず……………一七八
- 藝妓類似の行爲、戸の開放、通行人に對して
誘惑するを禁ず……………一八一

目次終

朝顔の鉢

—吉原遊廓—

||夏の朝飯||

花魁おいらんの羽衣はごろもはおばさんのおすみと一つの御膳おぜんを圍かこみながら朝飯あさひしを食くつてゐた。御膳おぜんの上うへには白瓜しろうりの漬物つけものが盛もられてあるだけである。おすみは番茶ばんちやをかけてさらさらと白瓜しろうりの漬物つけものをおかすにして食たべて

終つた。

佛壇に置かれてあるおりんのやうな恰好な可愛らしいさうして底の深いお茶碗に軽く二杯喰べるのがおすみの習慣である。カラカラと象牙の丸箸をお茶碗についだお茶で淨めて朱塗の箸箱に收つた。さうしてお茶を飲みながら凝つと見ぬ振で羽衣花魁の顔や姿をまざく見た。

おすみは元此樓で打掛を着て店を張つた花魁であるがもうそれは餘程前の事である。何故なればおすみはもう四十六の年であるから――。

おすみは淺草で生れた女である。ごつちかど云ふと小柄で、撫肩

ですらりとしてゐる。口許が可愛い、もう色の淺黒いお婆さんである――然しごつか垢抜けして黒襟のかかつた衣物に黒繻子の引掛帯で抜衣絞と云ふ全く昔風の造りの女であつた元の稼業を思はせるところがある。お客などをそらすやうな事はしない。もう人のいごつちかど云へばだまされ易い氣質の江戸育ちの女であつた。さう云ふおばさんを持つた羽衣花魁は打つて變つた女で、肩は怒つてゐる。肉體は充分に發育して肥つてゐる。目はくるくると丸くつて人懐つこいところがあつて丸顔の秋田生れの女であつた。おすみの髪の毛は黒く細くやさしいが羽衣花魁のは太くさうして黒い剛い毛である。毛が剛く黒いから立派な赤熊を結ふ事が出来る。然し

衛生的に肥り切つてゐる女であるから意氣なところが一寸もない。
 羽衣花魁はおばさんのおすみが自分の顔を穴のあく程見てゐるの
 も氣が付かないやうにゆつくりと飯を食べてゐる。朝飯のお菜が白
 瓜の漬物だけである事も一向苦にしないやうだ。

|| 羽衣花魁は ||

おすみは此花魁も人が全くいい。けれど人がよすぎて氣が利かな
 い。客を手練手管で操つて金を出させ様など云ふところがない。
 此方から客に打ち込むで惚れると云ふこともなければ、お客の方
 でも羽衣花魁でなければ是非いけないと云ふやうな客などは一人も

ない——。その邊に就いては全く羽衣花魁は能なしである。此花魁
 から氣質の素直なさうして物事に怒らないおとなしい寛大な性質を
 除いて終つたらそれこそ仕方のないものになつて終ふ……」と憊
 う考へた。おすみは
 「お前さんはこれから髪を結ふんだらう」と云ふと
 「はあ——結ひませうかと思つてゐますわ」
 「結ひませうかどころぢやないよ。今日は直きに廣井さんがやつて
 くるだらうよ」

「はあ」

「妾はこれから日本橋までゆかなければ。電車の乗換時間を利用つ

て仲店で買物してね。

お前さん何か用事はないか。廣井さんが来るからあの人のすきな甘納豆でも榮太樓で買つて來やうかネ」

「さうですなえ。だが無駄ぢやありませんかね」

「なに無駄な事があるものかね——ああやつてお前みたいなた女でもどこか取柄のあるところがあると思つて牛込くんだりからセツセと通つて遊びにくるんぢやないか」

「はあ」

「もう少しテキハキ氣を利かして面白く遊ばしてやらなければあの人だつて可愛さうぢやないか——今ぢやあの人がお前さんに取つて

は一番大事なお客ぢやないかい」

「さうなえ。もう二年越しになるやうですよ。」

「それ御覽なねえ——だが早いもんだね。ああやつてよくついでに通つてくるなえ。妾ならソリヤ大事に可愛がつてやるんだけれど……」

「アハハハハ」

恁んな會話を交はしながら二人はまだお膳の前に向き合つてゐた。

小さい蠅が羽衣花魁の大きい茶碗の端に止つてゐたのが白瓜の漬物の上に移つた。

夏の朝の氣分

夏の朝の太陽は隙間もなく照しつけてゐるが此處は西南向きであるので焼き付けるやうな光線は入つて來ない。寧ろほがらかな涼しい夏の朝風がそよよと沁み入るやうな感じで這入つて來る。おすみだけは涼しいと思つた。

天井に釣つてあるヤアトコセの藁細工の人形がフラ／＼と踊つてゐる。おすみは黙つて此羽衣花魁の部屋の前に三つ並べてある朝顔の鉢を見詰めてゐた。紫が二つと白が二つと咲いてゐた。昨日の朝咲いた赤は萎れてゐた。

不圖おすみは思つた——此朝顔の鉢もあの廣井さんが持つて來たのだと。いつも夜は來ず朝から遊びに來て午後の三時頃に歸つてゆく廣井さん——その人は牛込で古本屋をやつてゐる。以前女房を持つたが他に男をこしらえて逃げたと云つてゐる。今年もう三十七である。羽衣花魁は二十三である。

もう一と月の前七月の始め羽衣花魁に付き添つて検査場の吉原病院から歸つて仲の町の小間物屋の桐屋で買物して出てブラ／＼と大門の方へゆくと、向方から小柄の色の黒い四十近い男が朝顔の鉢を紐でさげるやうにして持つて來たのを見た。どこか見覺のある顔だと思つてゐると廣井さんだつた。

「おやまあ、お早く、綺麗ですねえ——此朝顔はごうしたの」
 「ううん——今おりき（羽衣の本名）へ持つてゆこうと思つて、實
 はお得意様から頂いたんだ」
 「それで牛込から持つて来たんですか」
 「ああ、電車で」

おすみは「ヤレヤレ」と思つた。此客にして此花魁ありと思つた。
 ……だからあの朝顔の事を思ふとあの悠長な廣井さんには此悠長
 な羽衣花魁が氣に逸つてゐるに違いないと思つた。さうして今更ら
 しく朝顔の鉢を見詰めた。
 さうして夏の朝の廓は實に物靜かで落ちついてゐた。

|| 揚巻花魁が ||

もうすつかり眞白に白粉をつけて化粧した此樓のお職花魁の揚巻
 が目覺めるやうな顔して廓下を通つて来た。

さうして羽衣花魁の部屋におばさんのおすみが羽衣とお膳をなか
 にして向き合つてゐるのに氣がつくと

「おばさん、お早やう——アラ朝顔が今朝は白も咲いてね。綺麗だ
 ことねえ——」

なごど透き通るやうな聲で如才のない愛想を云つて女でも惚々さ
 せる笑顔をみせて向方へへ行つた。もう揚巻は髪さへ綺麗に結つて

ゐた。さうしてほつれ毛の一本もなしに水の垂れさうな工合であつた。おすみは揚巻と羽衣とは慙うも月とスツポンのやうに違ふものだと思つた。

やがて揚巻の部屋には昨夜から流連してゐる横濱の生糸市場の仲買人の丸一大盡がゐて、もの仲の町藝者や幫間が上つたとみえて三味線の調子を合せる音締が聞えて來たし、「ヨウヨウ」と間の抜けた大聲を上げてゐる幫間の聲、花やかに笑ひ興ずる藝者やお酌の聲が波のやうに聞えてきたのである。

おすみは

「揚巻花魁はいつも變らぬ御全盛なこつたねえ」と沁み沁みと羽衣花魁に云つた。

「早く髪をお結ひ——そんな根の抜けた頭ぢやいけないよ。廣井さんがもうやつてくるよ」

「はあ」と羽衣はおすみの立ち上るに誘はれて自分も夢でも覺めたやうにはつと立ち上つてお膳を片付け始めた。

*

*

*

*

*

*

それから彼は三十分も経つておすみが日本橋へ買物にゆく仕度を済ましていざ外へ出やうと羽衣花魁の部屋を出やうとするところこへ

豆ごんが来てハガキを手にしなから

「おばさん、花魁は」

「今下階で頭を結つてゐるよ——なんだい」

「なんでもないけれど——ハガキが来たから」

「どれお見せ」

と云つておすみはハガキの差出人を見ると牛込××町××番地祐文堂書店廣井芳松とゴム印がハガキに捺されて宛名人は淺草區新吉原京町一丁目×××樓内今西おりき殿としてある。

さうして小僧を一人置いてあるとかねて廣井さんが話してゐたがその小僧さんの手蹟らしく

弊店主人が數日來より腹痛と下痢で苦しんでゐたが醫者より腸窒扶斯と宣はされ目下隔離されて本郷駒込の避病院七號舎に收容されて目下重態である。附添には弊店より婆やが行つてゐる。兎も角御知らせする。

と云ふやうな事が活版で刷つたやうに一字一字四角に書いてあつた。

おすみは突然の知らせで驚いてベタ／＼とそこへ座つて呆然としたが臆て氣を取り直し、下階の中庭の前の大廊下へ蘆を敷いて他の大勢の花魁と一所になつて今時分は梳手に赤熊をこはさせて雲脂を取つてゐるか癖直しをしてゐるか位の羽衣花魁へ知らせてやらうと

ハガキを手にしながら毬が轉ぶやうに急いで二階から下階へと大梯子を降りたのである……。

雇仲居の千賀子

—やと—

□雇仲居倶楽部は淫賣倶楽部なり
 七月二十九日夜十一時牛込區築土八幡町三十二番地活
 花師匠山田某方にて同區通寺町雇仲居倶楽部の會員佐
 藤しん(十八)宮崎ちか(十九)石川はつ(廿一)が賣淫中
 神樂坂警察署の手に押へられ、倶楽部會長古田たい(卅
 二)も共に引致拘留さる……(中央新聞所載)

私が忙がしくクルクルと旋風機の様な労働——米屋町仲買店々員の仕事を済まし、一日の汗を入浴で流した後、晩飯の出来上るまで椽で其日の夕刊を何氣なく見てゆくと前記の記事が出た。あつと思はず精力を一點に集めて一息に読んでいつた。

さうして読み終ると「ハハア、やられたナア」

と考へずには居られなかつた——過ぎにし事實の跡方をまざくと思ひ浮べながら……。

|| 初夏の夜 ||

——それは五月の初夏の夜の事であつた。抱一の句に「魚の背に

鎌倉山の青み哉」その初鯉が出盛つて江戸趣味を偲ばずには居られない様に食膳に上る五月最終の日曜日たる三十日、丁度米屋町が終日休みで一日ゴロくした揚句、牛込亭へ小さんの落語を聞いた。

スケの式多津、文吉の常盤津が濟んだ頃から雨が降つたり止んだりした。ハネてから私は明るい神樂坂の街を「ヤマニ、バー」に飛び込んだ。(此處は牛込第一の酒場で小説家の小川未明を始め、早稲田の所謂藝術家がよく飲んでゐる) 此處で友人のBと會つた。

Bは雑誌記者だが一人の左様——三十近いか極く垢抜けた根下り丸鬚の年増と飲んでゐるぢやあないか。此年増が例の雇仲居俱樂部の會長即ち女將だつた。(客の要求にも應ずるさうだ) 斯くしてB

と女將に連れられ私は雇仲居俱樂部に引き上げた。

東京麻布永坂の更科蕎麥と云つたらば、神田萬世橋の「藪そば」と相對して名高い奴だがその支店と向合つた神樂坂から或る路次の家。

赤い丸ホヤを被せた電氣の軒燈には「やどなくらぶ」となまめかしく大和撫子流で書いてあつた。但し私は雇仲居俱樂部へ始めて上つたと思ひ給へよ。

「さあ、どうぞ」テナ具合で狭い梯子段をギシ／＼と二階へ威勢よく上つたネエ。すると座蒲團を持つて上つて來た女。煙草盆を持つて來た女。茶道具を持つて來た女——みんな違つてゐる。

みんな下階へ下りて終ふと、女將は揚り花を程よく茶吞茶碗に差しながら「ドレがお氣に召して……」と云つたからアツと驚いた。

流石は大正文明式のお見立法だ。そこで私も臆せず「煙草盆がい」と云ふとBはニヤニヤツと笑つた。

——それぢやあツてんで私は夫から何したか？と云ふとクシヤクシヤした顔——鼻紙を揉め苦茶にまるめたとでも云ひさうな婆やと折柄のさみだれる夜の雨に相合傘——。

ダガこれぢやあ繪姿にもならネエし、風俗を壊亂もシメエ。通りがかりの岡焼鳥が「阿呆」と一聲磔を擲げられる恐れも無い。其邊は三好亭、花月、都なごこ小料理屋。ミドリ軒、華陽軒など。

と玉突。大弓場の龜遊軒と云つた具合に遊び場が並んでゐるからいかかはしい街だなと思つて歩いた。

——大きい屋敷につれて右に折れると築土八幡様の裏手へ出た。

「一時頃獨り下宿屋の雑煮を食す。四十にして家なさずとは正しく自分のことであらう」(新年雑感)と云つた小説家の近松秋江の下宿はこの邊りだらうと思つた。すると路次を這入ると隠宅、妾宅沁みたヒツソリした家が前記の活花の師匠山田方である。其處へ私は這入つた。

|| 夜の 小部屋 ||

——その夜の女は先刻煙草盆を持って來た女で假名「玉枝」事宮崎ちか子であつた。

千賀子——彼女はおつとりした而も可愛い愛嬌のウンとある美人だつた。例へば朝露を含んだ紫陽花の仇姿は無くとも又夜の雨に打れた海棠の優姿は無くとも、夜の小部屋に——紅紫取亂す嬌態はナンデ男心を惱殺せず置かう。

……しんとした海の底の静けさの如き更けし夜。ともすれば寂莫を破るは降りみ降らすみの雨の音と彼女の「流るる如き」囁きであつた。

夢現に聞いた彼女の催眠歌！
彼女の哀史！

其哀史の糸口を手操つてゆくと彼女は驚く勿れ、處は兵庫縣下淡路高等女學校の卒業生ではないか。

——兵庫に生れたちか子は生れながらに可愛い、子だつた由。けれども無常の風は誰が身の上をも襲はずに居らうや。そこに貧富の區別も、地位の區別もない。

彼女の父は彼女が九歳の折、あの世へ長い旅途の人となつた。十歳の時には母も父の後を追ひ慕うて矢張同じく旅立つた。

ちか子は人間の子として生れ落つる最初から慙うして幼くして不遇な境涯となつた。彼女には一人の姉と一人の妹と、一人の弟とを

持つてゐた。早くから姉は嫁いでゐた。父にも母にも死なれたちか子は二人の弟妹を背追つて渡世せねばならぬ。それは十二歳の彼女には到底出来ない相談である。

詮方なく、途方に暮れ、行手の道の遠くして、手さぐりさへ付かないうき世の難道に立ち迷つた彼女は全く百計盡きて終つた。只泣いて袖や袂は涙の雨に悲しくしめるばかりであつた。賽の河原の幼な兒が延命地藏菩薩の慈悲に縋つて乳をたよるやうな心持になつてちか子は二人の弟妹を伴ふて姉の嫁してゐる大阪市は西區北堀江町二丁目三百四十番地のそれがしへ厄介になる事になつた。彼女の弟妹は大阪の此家で何不自由なく其日其日を送つてゐる間、ちか子は

兵庫縣淡路高等女學校に學籍を置く身となつて、紫紺の袴軽く踵の
高い靴で小砂利を蹴つて校門を潜り、螢雪の窓に親しんだ。

|| 彼女の身の上 ||

父も母もこそなけれ、ちか子の身の上は未だ薄命を啣ち、憂き世
を慨くには當らない——女として相當の教育を受け、良妻賢母の資
格を得やうとするのだから。

されば、高等女學校に通つてゐる頃も矢張情の濃い彼女の事とて
皆から、クラスメエトから、可愛がられたのである。斯くて淡路高
等女學校も目出度く卒業した。

最早彼女の考へ一つで、ごんな權門富豪へでも良妻賢母となつて
嫁ぐ資格は得たのに、如何なる天魔の魅りしか、彼女の姉の居る葦
の浪華よりも、果た山水明媚にして優雅な鴨川の京よりも、何故か
東京を慕ひ出した。

「懐かしい東の空よ！」と。それが南國の小鳥の胸毛のやうな感觸
を持つてゐる手入らずな「處女」の彼女の心に軽い小波を湧き立た
せた。思へば、思へば夫れが今日の墮落の原因となつた。それとは
知らず彼女は東京から送つて來る小包の中殊に「三越」とマアク付
けた（印しづけた）包装紙の品物はごんなに憧れの目的となつたで
あらう！。

婦人畫報、婦人世界などに毎月の巻頭を飾る美はしくして、氣高き淑女令夫人。みんな東京に住まつてゐるのだ。東京！東京……その言葉は戀人の名のやうな異様な刺戟と興奮を以て、彼女の弱いさうして女鳩のやうにおどおどしい純一な胸に打ち込んで来た。折しも世の中は一變した——と云ふのは「女子に三従あり」女大學流な忍従棄權を唯一の生命と教へて居た日本の女子教育も、新しい歐洲文明思潮なり、婦人問題なりがドシ／＼紹介されて、日本にも「新しい女」が出来る騒ぎになつて「妾は太陽なり」「イブセンの芝居」「ノラ」に於ける「ノラ」の如く婦人として自覺せざる可からず「輝ける太陽に向つて日向葵の如く燦爛として美しく婦人は生け

よ」テナ事になつた。
げにげに、千賀子が高等女學校を卒業する頃には「自分は清く、高く、さうして新らしく生きざる可からず」と何時しか考へるやうになつた。

——東京！ TOKIO！——

あの大好きな東京！。その東京へ行つて獨立し、さうして自活しやうと云ふ觀念が岩のやうな動かぬ思ひとなつて胸中に宿り出した。例へば「女タイピスト」も愉快であらう。「女計算係」も宜からう。「女事務員」も曰く何。曰く何である。況んや「女美術家」「閨秀作

家」に於てをや。あゝ今にして呪ふべく、又憎むべきは「東京」の二字であつた。かくてちか子は姉の夫の親友を尋ねて上京した。それには姉も姉の夫も全然不承知で、殊に姉としては縁あらば然る可き處へ嫁がせたいと思つてゐる矢先であり、又實際何にも汚塵に染まない乙女を、純潔白絹の如く美しい處女を恐ろしい大東京へ旅立すなんて——どう考へても、是以上危険な事は無いと火のやうに躍起となつて怒り反對した。

事實姉は在來の「おんなの道」を正當に踏んで、而もそれを正しいとしてゐた女で、無論ちか子の口に言ふ「清く、高くさうして新らしく生きざる可からず」等と言ふ言葉のほんどうの意味は呑み込

めなかつた。

さて上京した彼女は府下豊多摩郡中澁谷の鐵道院官吏それがし「姉の夫の親友」の許に寄寓して就職口を捜がした。聽て京橋區新富町一丁目二番地の貸自動車と電気工業を經營してゐる三共電気商會の女事務員となつて月給八圓五十錢を貰ふ事となり、その頃牛込區通寺町の雇仲居俱樂部の會長古田たい(二十二)も同じく此商會へ通勤してゐた。

さうして親しい口をかはず間柄となつた。しかし八圓五十錢の月給は三越を夢み、帝劇見物を理想とし、婦人畫報の口繪を憧がれて上京した女の身に取つて何の價値を見出さう。無論白粉や身の廻

はりのものを買ふだけでも毎月不足した。

一方生理上の壓迫、激しい一日の勤務を済まして歸る彼女は刺戟されて興奮したかつた。

夜毎寝つかれなくなつて色々な幻想が夏の雲のやうに頭の上にのぼつて來る爲めに、夜毎頭は千々に亂れた。ああ白粉はなんのためにつけるの？口紅は何故か？「何故に紅鐵漿つける」と古い小唄は甘く歌つたものだ。物足らぬ。黽殺しにでも逢ふやうだ。どうしても物足らぬ。コレツキリぢやないと思つた。

|| やさな俱樂部創立 ||

其矢先牛込通寺町に雇仲居俱樂部が創立された。ちか子は雇仲居俱樂部をどう穿き違へたか、又は甘言に乗せられて欺かれたか、何の反省も、何の反撥心も無しにコロリと脆く陥落して俱樂部員となつて終つた。是は大正四年五月十九日のことである。

——五月十九日と云へば未だ一週間しか経たぬ前のことではないか。さうして一夜三圓の契約を以て収入の半額を自分の所得とした。幸か不幸か彼女は俱樂部員になつてから毎夜客席に出てよく賣れる。手入らずの處女はかくして奈落のドン底へズル／＼と落ちて終つた徑踏を辿つてみると人間の善となり、悪となるのはホンの一瞬間に於てきまららしい。

一、ヤトナは容姿上品で少くとも一藝の心得は元より禮式を心得。婦人としての勤めは何事に限らず致します。

一、ヤトナは御散步、觀劇、旅行等のお供には御家庭通り何一つ御不自由なく満足申上げ、衣服（例令へば奥様風に、令嬢にも）髪（丸髷にも島田にも）その他すべて御好み通り致します。

——牛込雇仲居俱樂部會則——

なんと可憐な情を含ませた會則であらう。高等女學校を出たちか子は此會則の下に立つて働く女となつた。

げに男の耳に最も優しく美はしく響くのは小鳥の歌でもなく、蟲

の調べにも非ず、眞に聞中濕やかに思ひのたけを囁く婦人の聲である。ちか子の物語も始めは遊戯的氣分で聞いてゐたのに何時か眞實に諒々と説き起し、語りすす言葉に吸ひ付けられ、頭は鏡の如く澄んで終つた。……私はビシビシ刺すやうな言葉で其不心得を説いて詰り突けて「正しい道へ歸れ！」と教へた。

——妾の行くべき途は——

35
墮落して間もないのと、世慣れぬのと、教育あるのと其三つの資格が早くもちか子の隠れ潜在れてゐた良心を喚び起してか、彼女は身の投げ出して、激しく咽び泣いて米屋町の小僧輩の自分に向つて

（妾の行くべき途を教へて下さい）と云ひながら、やゝなの一笑を求めに來た色慾の餓鬼に等しい自分に悠々泣き叫んだのだつた。

豫定の紙數をツイ超過して終つた。此處で筆を擱くが、私は賢明なる讀者諸君の前に此夜の長いローマンス（物語）を全く未解決の儘投げ出して置く。提供する。

——ああ可憐な彼女！。いとしいちか子！。一夜遂ひにローマンス（物語）と泣きの涙で明かした彼女——千賀子（私には故郷の人達の呼ぶやうに今後おちいさんと本名を呼んでくれと云つた）は、

假名の「玉枝」は今も猶（妾の行く可き途）の教示を明け暮れ待つてゐるだろうか？。それとも佛蘭西は巴里の惡の華「椿の姫」（*Phoensine plessis*）の如く良心の玉をブツ潰し終はし墮落し終つて、バリジオ、コウラ（色彩ある巴里）に代えて（燦爛たる東京）を歌つてゐるのであるうか？。——再會も三會も約した自分は事實多忙に多忙を重ね、旅に就いたりして又逢ふ日の機會を失つてゐる中彼女は拘留される身となつたのだから……。

其後どうしてゐるだらう。
其後どうしてゐるだらう。

筆者云ふ。
 牛込雇仲居俱樂部は其後所轄警察たる神樂坂署の監視嚴重を極めたる爲め、營業出來ず遂に間もなく廢業し、女も解散して終つたのである。惡業は斯くして太陽が現はれ出づるとき朝霧の如くに消滅してゆく。

柳散るころ(柳新道)

——日本橋郡代——

|| 曉方の秋さめ ||

39
 ツタツタと秋さめは降りしきつてゐた。おきちは——なんでも曉方近い三時時分から雨が降り出したと思つてゐた。そのころ厠にゆくため床を起きたときには黒い炭のやうな雲の間に虧けた月があは

ただしく走つてゐたのを覚えてゐる。

廁から出て床へ入ると一人寢の佗びしい思ひと昨宵の飲み過ぎからくる胸の間から、なんとなしに心持が迫つてくるやうな感じになつてくる。涙がほろほろと頬に傳つてなされるやうな氣がする。頬に垂れかかつてゐるほつれ毛を掻き上げても掻き上げてもほつれる。襟先から頤にかけて枕の寢癖で、べつとりと髦の後れ毛がひと掴み汗でくつついてゐるのを指先で摘みあげて髦の毛に合はすと襟先が油汗でニチャニチャと指先を氣味悪くさせた。

「寢付こう」——として臉を閉ぢたが心が眠らないやうな氣がする。神經が身體や頭の中で働いてゐるやうである。足の指先がビリビ

リと痙攣的に動いてもそれが頭の中まで感ずる。「眠れない」とはつきり口先に出さぬばかりに心に吐いて咽喉まで掛けてゐた掛夜具を兩足の爪先で引き下げたばかりでなく兩手で胸の下——腹の邊りに掛夜具の襟がかかる位にして終つて、右を下にして寢てゐた寢像を換えて枕も直し、正しい仰向になつて兩足を揃えて、兩手の指先と指先をお臍の上あたりの見當にある掛夜具の襟のところで正しく組み合せ、すつ、すつと鼻で軽く呼吸しながら、また寢入るうとした。不圖——恚う云ふ寢姿の恰好で亡き母が北枕、逆さ屏風の中に——

——やつぱり兩手を組み合はして往生してゐた姿がまざまざとはつきり思ひ浮べて、おきちは慄然として終つた。さうして腋の下あた

りに冷汗が出たやうに驚いた。

何年かの前——もう歳さへ忘れてゐるが、あの白い壁の酒倉と大きな木組で出来てゐる酒問屋の暗い家が立ち並んでゐる靈岸島の新川——その新川から一寸越前堀の方へ這入ろうとする横町、その路次の格子戸の嵌つた家——そこで、亡き母は最後の水を取つたのであつた。その前の前の年に親父は亡くなつて母は貯へも、収入の道もないため途中に暮れて家の中はなんとなく暗く濕つて終つた。

たつた一人の兄は親父が死ぬまで永らく勤めてゐた酒問屋榊喜の番頭の世話で米屋町の仲買店に小僧となつた。さうして母はおきちとおきちの弟秋造とを手許に置いて、さびしく日を送つた。もう親

父の生きてゐた時のやうに常盤津と踊を掛持ちで習ひにゆく事が出来なくなつた。

さう斯うしてゐる内に一二年は經つて母も黄泉へ旅立つ日を迎へた。

母の死は父の死より猶暗かつた。父の死んだとき悔みに來たり、お通夜に來た酒問屋の人々は母の死のときにはその大部分はもう顔をみせなかつた。米屋町に小僧に出た兄の正造も通夜は出來ないでソコソコとお線香をあげに來たり、葬式に列なつたりするやうな境遇となつて父方の叔父と母の妹とが葬ひや後仕末をした。母の死のときが——一番強く、一番暗く悲しくおきちの心に刻みつけられて

終つてゐた。

——おきちはそれから自分の寢姿が母の死像のやうに、自分の寢顔が母の死顔のやうな氣がした。枕許に白團子が置かれてはありやしまいかと思つた。——線香は夢を誘ふやうな煙りを立てながら頭の上の方から鼻先へ立ち迷つてきはしまいかとも思つた。さうしておきちはまた身慄ひするやうな恐怖を覺えた。——。

ついで今まで亡き母などを思ひ出したことがないのに今夜に限つて——なせ思ひ出すのであろうか、何か魔でもさしたのか知らなごと思ふと胸がピシヤツと上から押し潰されるやうな涙ぐんだ暗い苦

しみが迫つてくる。朋輩のおりんのところへでも添寢して、せめてこの寂寥から逃れやうと考へたがおりんは客を取つてゐるのだから駄目である。物干や、勝手口のトタン屋根などに音をたてて時雨が降つてきた——。本所深川の方の工場の汽笛がひとつ——長く、遠く鳴つてゐる。

いまにもやむかと思つてゐた時雨はゆるやかな音に代はつたけれども猶やまないでつづいてゐる。思ひに疲れてきたおきちは——次第次第に深い睡眠に陥つてゆくやうな、氣になつてきた。うとうとしてゐる中を時雨は甘い夢現の穴へ——誘ふやうに悲しく降りやまなかつた、恚うしておきちはいつの間にか睡眠の底に沈んで終つ

た。

|| おきちごおりん ||

夢の底に、睡眠の底に幾つも幾つも工場、工場の汽笛が鳴つてゐたのを覚えてゐる。お寺の時の鐘が微かに幾つも呻つて鳴つたのを知つてゐる。さうして「もう朝だ」と云ふことを知つてゐながら遅く寝た昨夜の疲労と、曉方の寝はぐれたがために起きやうとも思はなかつた。だが何時だか時間だけ知りたかと思つた。さう恚うしてゐる中に唐紙がするすると開いたやうな氣がしたので、曉方のつゞきのやうにまた驚かされて目を大きく開けた。すると寝みだれ姿の

おりんが帯もしごろにして女の木枕を胸にかかえながら立つてゐた。おきちは安心したやうにおりんに、

「もう夕の字歸つたかい」と聞くとおりんは黙つてまたするすると唐紙を締めておきちの枕許に来て、片足を立ち膝のこころもちでべたべたと座つた。前髪に挿してゐた黄楊櫛をはづして右の鬢を大きく二三度搔いて櫛を口に銜え、両手の指先で髻のほつれを巧みに揃えて終つたと思ふと、おきちの床に這りかけながら、やうやく始めで口をきき、

「ああ、いまかへつていつた。でお前さんどこへきたのさ。あたいもいつしよに入れておくんな——」

——おきちとおりんの二人がぐつすりほんとうの熟眠をして目醒めたのは茶の間の柱時計が十時を廻つてからのことであつた。

元氣のない日のやうに思はれて秋さめはじとじと降つてゐた。曉方の時雨が本降りになつて終つたとおきちは思つた。おきちは顔を洗ふとすぐ鏡臺の上の引出しから江戸櫻を取りだして頑顚へ指先で強く張り付けた。口の中がねばついてゐるところへ、煮詰まつた若布のおつけで、炊いてから時間がたつて終つた冷めた柔らかいグチャつくご飯を詰め込んでも甘くもなんともなかつた。それでも大根の新漬が齒切れがよくサクサクする斗りでなく鹽氣も利いて甘いので番茶を熱くして茶漬飯にして辛うじて極く軽く二杯食べた。

|| 秋さめの午晝 ||

店の竹格子の嵌つてゐる窓のある部屋——そこにおきちとおりんは懶うくくの字に身體を崩しながら座つてゐた。黒文字で齒の隙間を突つついてゐたおきちはボンと窓そとへ黒文字を抛つて、

「りんちゃん、顔刺つて呉れないか」

「いやだい——」

「あれさ、どうして——顔刺代出すよ」

「通りの政床の金ちゃんに刺つて貰ひなねえ」

「雨だからあすこまでゆくのが憶劫なんだからさ」

「顔剃つたついで咽喉を剃刀で突いてあげやうか」

「願つたり叶つたりだね——さあ、やつておくれ。どうせ命はいらないからだんだから」

「おつとよし、よし」

とおりんはヨタヨタと立ち上つて口嗽ぎの眞鍮の金盃に茶の間から鐵瓶の湯を汲んで來、鏡臺から剃刀を出して「さあ、凝つとしておいで——ぎゆうと咽喉を突いてやるから」と云ひながら兩袖を肩まで捲くりあげ「さあ覺悟はよいかときたね」とおきちをそこにするすると長く仰向けに寝かしながら朱塗の煙草箱を髭のところへ枕とし「南無阿彌陀佛」と小聲に云ふおきちの顔をすつすつと剃つて

いつた……。

「さあ、今度は襟つ首だよ」

とおきちを起し「格子窓のところへおよつかかりよ——もつと抜衣紋にして」

おりんは襟を剃りながら「さいちやんは肌がいいから荒れてなくつていいねえ——もう髭や鬚に癖がついたね。今日は結う日かい」
「ああ——お午晝つから結はなければ、もう島田の根が抜けちやつた」

「ぐらぐらだねえ」

「濟まないがねえ、りんちやん」

「改まつてなんだい——金を貸せかい」

「冗談お云ひよ。中坊主を剃つておくれと云ふんだよ。」

「贅澤云つてらあ——今日髪結さんここで缺でチヨキチヨキやつて

お貰ひよう」

「頼み甲斐のない女だねえ。佛造つて魂入れずつてお前さんのことだよ。襟を剃つた序いでに剃つてお呉れな」

「中坊主剃るだけでは氣が濟まない。さんざつばら罪造りをしたお前さんのことだから、もう年貢の納めどきにすつかり髪を此金盥のお湯で濡めしながらおろしてあげやうぢやあないか——尼さんにおなりよ、恚んな島田になんか結つて男を迷はすより、その方がごん

なに後生がいいかわからないよ」

「それもそうだねえ尼さんになつて辛抱が出来るかしら……それぢやあ髪をおろして貰はうか」

「ああ、おろしてあげるともね。その方がきいぢやんのためだよ。尼さんになつて、さうして死んで蓮の花に座つて極樂にお前さんがゐるとき——あたいは地獄でまづ閻魔さまに舌を抜かれ、それから鬼の奴めに針の山を引つ張り廻されたり、血の池へ抛り込まれたりするんだらうねえ」

「ごうせあたしたちは地獄へ落ちる人達なんだらうねえ」

「今更遅いよ——親が居りやあ、きいぢやんも恚んな賤しい娼賣は

しないで済んだものさ。みんな廻り合せと云ふものの恁んな娼賣を
してゐちやあ——全く後生が恐ろしいや」

と云ひながら襟を剃つて終つたおりんは鏡臺から油沁みた小鋏を
出して島田の鬘を抑へ付けながらパチンと元結を切り、

「お前さん、今日結ふとき、もう少し根を低く結つてお貰ひ——」

さうして島田の鬘をばらばらと崩して鬘型をはづし、パチンと根
掛の元結を切り、また入毛の元結を切ると烏蛇のやうな、さうして
紆曲つてゐる鬘を取り出してばさつと鏡臺の方へ抛つた。最後に根
の元結に鋏を入れると靜かに髪は崩れていつてダラダラと垂れた。
油沁みて黄色くなつた元結が下に落ちていつた。前髪を結はえてあ

る元結をはづす。島田の髪を結つてゐたときとは人相が違つたやう
になつた。

おりんはおきちの頭に両手をかけて、中坊主をあけながら剃刀を
あてていつた。やがてすすつと五分位の毛が剃れて落ちて、跡
は青々とした圓い中坊主になつて終つた。

「さあ、剃れたよ。髪をおろすのは此次にお預けしておこうから、
お名残に綺麗に今日は島田をお結ひ」

「もう剃れたの、ごうも難有う——ううん今日は鴨脚返しに結うん
だよ」

——秋さめに暮れる午後——

町田正造は黒襟のかかつた胡麻柄の絆纏に唐棧を着さうして細帯を前で締め、浅草橋で電車を捨てて、降りしきる秋さめを蛇の目傘で受けながら、日本橋區は郡代の銘酒屋「銀猫や」へと柳新道を這入つていつた。

恚うして正造は妹のおきちに逢ひにゆくのだつた。「ごめんください——おきちはありますか」と云ふと

「ごなた——おや正さん、」

と眉毛のあとも青々とした女將の「おしん」が飛び出してきた。

女將は黒襟のかかつたお召の衣物に茶と黒の博多の片側帯を締めてゐた——。

「さあ、おあがんなさい」

「ありがたう、今日はおきちは」

「先刻髪結に出かけ、今りん公と湯々へ行つたんだよ。あがつて待つておいでなさい」

正造は茶の間に通されて、おきちの歸るのを待つてゐた。

正造は女將に好かれてゐる程いい男であつた。女將は恚んな娼賣家を始める位の女だから元は神明の矢場で、招き猫のおしん——と

云はれて一寸腕を鳴らした女である。今は兩國の貸席「はや川」の親方の妾となつて此銀猫屋の采配を振つてゐる。「はや川」の親方は喘息で——今は伊豆の伊東に行つてゐる。正造は抱へのおきちの兄である。女將のおしんは此郡代の銘酒店のお客と云ふものが殆んど店の番頭とか雇はれ人で、ごつちかど云へばおとなしい男ばかりやつてくるのである。

正造だけは米屋町を失策つた博奕打である。合百師である、「悪」である——おしんは博奕打の客は厭がるけれど、おきちの兄の正造だけは蟲が好いてゐるのだつた。おしんは正造が博奕打であらうとも、また合百師であらうとも——またよしんばさうでなくつても矢

張正造を蟲の好く男と思つたであらう。何故なればそれ程正造は色男なのであつた。正造は先代市川左團次の苦味走つた目付と、先代の市川小團次の意氣な姿を持つてゐた——色が白いと云ふことは愈々正造をして金が持てないとして終つた。

……思はず作者の談義が長くなつた。

|| お銚子を取り出して ||

雨がしとしと降りやまないで茶の間は暗かつた。正造は茶の間の長火鉢の横にキチンと座つてゐた。

女將のおしんは——勝手から膳を一つ持つてきた。茶箆筒から銚

子を出して酒をついで胴壺に入れた。膳の上には茶箆筒から出した鹽辛が載せられた。今度は女將は海苔を黙つて焼いた。薄暗い茶の間、柱時計の時を刻む音ばかり高かつた。白粉氣のないおしんの顔は青白く見えたが火鉢の火の反射で頬から下が赤くみえてゐた。やつぱり、青白い両方の手先に海苔を持つて黙つて火鉢の上で焼いてゐる様子に正造は「いい」と見入つてゐた。房々した洗ひ髪のおくれ毛が頬先にかかつて風情があると正造は思つた。おかみは海苔を折つて、切つて、また折つてまた切つた。正造も黙つておしんの手先をみてゐた。さうしておしんのうるみを持つた大きい目をも盗み見すには居れなかつた。おしんの洗ひ髪にも――

指先を觸れてみたいやうに思つた。あの毛の端に指先を巻きつけて、あのおしんの肩先に手を置いてみたかつた。――しかしそれはまつたく及ばない空想にすぎないのだと自ら反省した。さうして悲しいことだと思つた。

「さあ、兄さん――なんにもないけれど、ひとついかが」

「おかみさん――あつしにですか。濟みませんね。いいんですよ――まつたく濟みませんねえ」

「濟まないのは今日始つたのぢやないから――さあ遠慮なく、なんだねえ兄さんは、それとも妾のお酌ぢやあ氣に入らないとお云ひなの」

「あ、ごごうしまして——勿體ない位でエへへ——ちやあひとつ」

「ひとつと云はせないよ——澤山つぎますから、妾の大事のいる男だもの」

「叱られますせ、親玉に」

「そんな水臭いことお云ひでないよ、アレは喘息で伊豆に行つてゐるよ」

「へへへ——さうですか、そいつはちつとも知らなかつた」

「兄さん——鰻の罐詰があるけれど食がるだろう。罐詰はおいしくはごうせないけれど」と云つて茶箆筒から罐切と罐詰を出した。

「なあに、もう結構ですせ」

「結構の事があるものか——好かないねえ水臭くつて——おやなかなか堅くつて切れない、ごうしたんだらう」

「あつしが開けやしやう」

「なあにいいよ、コレシキなことが」

と正造の固い大きい男らしい手先は魚の肉のやうな柔かいぶよくとしたおしんの手先から罐切を離さうとする拍子に罐切はおしんの左の薬指を掠つて傷付けた。

「あ、これや悪かつた、勘忍してください」

「勘忍も願人坊主もないわ——」と云つておしんは正造をやさしく

笑ひながら目と口を使つて睨らむで怒る眞似をした。おしんのた
るんだ、さうしてうるみを持つた目は何物も溶かして終ふやうな優
しみと風情を持つてゐた。おしんは正造にすつと思ひ切つて倚り添
つて來て

「さあ、兄さんのせいよ——血が抑へてゐる指の間から出てきて
よ」

さう云ひながらおしんは右手の人さし指と中指とで抑へてゐる傷
口から沁み出てくる氣持のいい血のいろを凝つと見入つた。

「濟みませんが火鉢の右の小さい引出しの一箱下に伴創膏があるか
ら出して頂戴」

「妾しのこの懐ろから紙を出して—

正造は云はれるままにおしんの懐ろへ手を入れて紙を出した。さ
うしておしんの左の指を紙で抑へつけながら伴創膏を舌で嘗めて貼
つた。血は逆るやうに今度は伴創膏の下に漲つてきた。伴創膏の隙
間から血が見えて來た。正造はおしんから受取つてゐるさくら紙を
折つて繃帯の代りにおしんの薬指を強くぎゆうと縛つた。おしん
は自分の指先を血のめぐりのとまるほど正造が締めつけるのを快感
を持つておとなしく黙つて締めつけられてゐた。

さうして處女のやうなやはらかい溜息とはにかんだやうな邪氣の
ない笑ひを持つて正造の顔を今更のやうに見上げた。

——まだおきちも、おりんも長湯から歸つて來ない。

日本橋區は淺草橋々畔の郡代の柳新道もまだ日が暮れるには如何にゆく秋の柳散る頃とは云ひながらまだ早く——さりながら曉方から降りしきつてゐる秋さめはまたすぐには止みやうもないのである……。

*

*

*

*

*

現代には交渉のない無頼漢——然し徳川の葵の御紋の御代であつた江戸の幕末、文化文政天保なごご云ふころには無頼漢、博奕打なごの戀は美しく悲しい草双紙仕立の背景を持つてゐた。三味線情調の中に包まれてゐた。

さうして現代式な淺草千束町、十二階下の新聞縦覧所より傳統的で、また長い歴史のある郡代——その郡代は人々からもう忘れられやうとしてゐる。その取り残された郡代の銀猫屋の女將と米屋町で合百をしたり、博奕をしたり天下の御禁制を犯してゐる無頼漢との戀は——また江戸幕末の無頼漢と遊女の戀のやうに、三千歳直侍、十六夜清心後に鬼薊清吉の戀のやうに、餘りに非現代的に、さうして三味線でなければ歌ふ事の出來ない餘りに清元らしく、餘りに草双紙仕立らしくある。

これも作者が横から飛び出して無用の長物然たる口上を述べる臆測である——。

貴婦人おきん

——濱町高等内侍——

夕月が柳の髪にかゝる頃

朝の寄付が十四圓二十錢ドタで、午晝の本場の公定値段(割平)が十四圓と飛び臺の三錢で、朝の寄附で本場合百を五十枚賣付けたるのがコツチのものと極めて、ごうせ泡錢だから、思ひ切つて此五十兩と云ふ小判を捨てやうと考へた。さてまた葎町のあの妓(と云つ

て不見轉を見つてゐるばかりで)のところか、それとも相場師なんかモテナイ新橋村かと考へたが、今日に限つて名案が出ない。

兎も角第一公式の姿となつて雪駄を茶羅茶羅でなく、空氣草履を突つ掛けてあの「光の巷」なる人形町を歩いてゐた。

ところへ仲買店「それがし」の店の者の青木千太郎と云ふのが向方からやつて來た。何時も元氣のいゝ「千ちゃん」が妙に寂しい顔してゐるので

「やあ、」

「やあ、」

「なんだい、サイダアの氣の抜けたやうな、風船の瓦斯を抜いたや

うな、恐ろしく萎れてゐるぢやあないか」

「ううん——なんでもないだがネ」

「なんでもなくつて、なんでもあるんぢやあないか——千ちゃん一流の遣ひ込みかい」

「お手の筋だがネ——實は大切のお得意様のをやつつけたんだから、この金庫の信用をなくしてちやあ、俺らあ米屋町なんか用はない——と云ひたいんだからねえ」

「お得意様つて誰だい——まさかカネ一印ぢやあねえだらう」

「ところがカネ一印だから困つたんだ」

「ううん」

カネ一印とは誰か——今は船大盡と呼ばれ時めく×××氏である。千ちゃんの一の客で（實は千ちゃんとは遠縁なり）あつて、千ちゃんなるものは四千五百圓の本米の賣建代金で悪いとは知りながら買思惑をして、千圓以上の缺損をあけて終つた。まあい、僕も一肌抜いて缺損を填めやう。兎も角齧晴らしと相談旁々一杯飲まうと私は千ちゃんなる者を誘ひ出して、柳の影が水に映つて風情ある處——夏には東京一の遊び場所である柳橋の或る鳥料理屋の鬨を跨いだのは、夕月が柳の髪にかゝる頃であつた。

——千ちやんの挿話(エピソード)——

思ひ切り川風に吹かれ乍ら、此處で二人は夏向の料理を肴に盃を幾杯も乾した。そのとき千ちやんが語り出す「挿話」は貴婦人おきんの事であつた。

千ちやんは「今日から約一月も前の事であつた」と前置しながら、「それは大川端に蝙蝠の出盛つた——さうしてやつぱり今夜のやうに、夕月が柳の髪にかゝつてゐた頃合だつた。千ちやんは仲買店の清さんと云ふ人に誘はれて濱町の待合 壽(假名)と云ふ家に行つた。待合の女將の云ふやうには「今日から出た妓がゐますから、それ

を呼んでやつて頂戴。高尚なのよ」と云ふから「年は若いかい」「さうねえ。二十三四位かしら。千ちやんは年増好みだからいゝぢやあないの」清さんは「そんなのを呼ぶより、いつもの「かねちやん」を呼んだらいいぢやあないか」

さう云ふ風向か、あどけない物足りない若いかねちやんより女將のさう云つてゐる女を呼んでみやう」と考へて、私はその女を呼ぶ事にした。

髪はハイカラに取りあげて萬事お嬢様仕立ての芳子と云ふ清さんのお馴染が来て、暫く小一時間も立つて私のが来た。金鶴香水を匂はして藍がつた羅衣に、黒地に銀を置いた夏帯、秋草を墨繪に描い

た長襦袢を着込んで、高尚な好み。髪は上品な丸髷で白金の簪を挿して、是が往來で逢つたら、會社の何々課長とか重役、男爵あたり
の夫人ではあるまいかと思はせるやうな「マダム振」を發揮した女
りであつた。

目は糸引眼で涼しく、體は骨細で夏向きのすらりとして夏瘦でもしてゐると思はれる。——言葉の少ない、情の濃い女と其夜に印象された。然し顔立が何處か寂しいので、古い言葉で云へば、海棠が夜の雨に打たれたやうな清い、而し妖めかしい、と思つた。然し其後、其夜の追憶——彼女の情が忘れかねて再び壽を訪問したが病氣だと云つて、逢ふことが出来なかつた。それから三日た

つてまた訪ねた。矢張逢ふことが出来なかつた。

戀の奴のやうな型になつて今はその女——おきんと名ばれる——が幻のやうに毎日毎夜頭を悩ましてゐる。第一の夜、いさゝかの酔から麥酒のコップを倒したのを、おきんが麻のハンカチーフで、酒沁みの私の膝を拭いて呉れた。そのハンカチーフを其後洗つて人形町通りのおある化粧品屋から金鶴香水を買つて来てふりかけ、恰も移り香を嗅ぐやうな思ひで、そのハンカチーフを今も持つてゐる。誠に都々逸の文句通りな

「消えぬ移り香未練を誘ひ

思ひ切れない氣にもなる

と云ふ気分を日毎味はつてゐる。

これで「千ちゃん」の挿話は終つてゐる。

——私是一體他人のお惚け話を聞いて、花柳界の黒人のやうに「おのろけはいやよ」と云つて退けて終ふやうな事は嫌いで、ごこまでもラブ・ストウリイ（戀愛物語）を同情持つて聞く性質なのであるが此戀愛物語ばかりは餘りに單純なので、内心「千ちゃんの浅い心持」を笑つてゐた。

|| 百夜通ひ ||

千ちゃんをして「逢ひ見ての後の心にくらぶれば昔は物を思はずりけり」とばかりに、たつたひと晩で戀の奴とさせたおきんを拜見しやうと考へて、千ちゃんと柳橋を渡つて兩國廣小路で分れたのは九時すぎであつた。

千ちゃんが電車に乗り、築地の方へ去つたのを見済まして、兩國公園のところから辻俵で、私は濱町へと運ばれた。

「おきんと云ふのを呼んでお呉れ。ひと月前に出たのだ」と私は待合「仲よし」(假名)の女中に云ひ附けると、貴婦人のやうに腕環までしてゐる、萬事高尙で淑やかであるから、早くも「貴婦人おきん」と云ふ名がついたとペラペラ喋べつた。「兎も角早く呼んでお呉れ」

と催促すると女中は萬事呑み込み山と云つたやうな顔して下階へ降りていつた。

旋風機に吹かれながら、此處でも麥酒を飲んで、貴婦人おきんの來るのを遅しと待つた。

「お相憎様ねえ。病氣でお座敷へ出ないんですつて」と云ふ元氣のいい女中の聲が私を全く驚かした。ガアアン……と鐵槌で、ひとつ頭を打たれたやうな氣がした。

「いいのを取り持つわ、しほちゃんできなければ」と頻りに女將や女中が金を費消させ様とするのを、妙にスネて終つて「いづれ、近い内埋め合せするから、今夜だけはごうか歸して呉れ」と拜むや

うに手を合はして此家を出た。因みにしほちゃんなるものは此家で私が遊んだ栞と云ふ十九になる丸ポチャの江戸ッ兒娘である。而も親父は仕事師であるさうで勇肌な、勝氣の女であつた。今夜はその女さへ求むる氣はしない。

「おかしい方ねえ。ちやあ、ごうかお近い内に」

「ほんとうにお近い内に。随分おかしい方ねえ」

と云ふ待合の女の聲々に送られ戶外へ出た。

おかしい方、随分おかしい方——と云はれたが、いつまでも己を罵るやうな感じを失はさず道に私に歩かせた。「寂しい男」とツクツク自分を思はずにゐられなかつた。

私は捨てられた小犬のやうに沈黙つゞけ乍ら、自分の棲家の本所松坂町へとスタスタ歩きつゞけた。

翌くる夜——私はおきんを求めにゆかうかと思つた。然し止めた。その次の夜——その夜もゆくのを止めた。

三日目の夜にはゆくには當然の権利があるやうに、何等反省もなしに待合のお江一矢格子を潜り、たたきの框に軽い駒下駄を脱ぎ捨てて上つた。

不幸は、彼女と逢へない、彼女と逢ふ資格がないとばかりな様子でまたやつて来た。恚うして此夜も逢ふ事が出来なかつた。病氣で休んでゐるとの口上であつた。

それから二日経てまた待合へ出かけた。

矢張逢ふ事が出来なかつた。私はもうとても逢ふ事が出来ないうに考へて終つた。

小野小町の許へ通つた深草の少將の百夜通ひのやうな氣がした。

その夜はもう諦めたやうな心持になつてしほちやんを呼び、深く酒を飲んで、しほちやんを困らせた。

その夜、貴婦人おきんの顔の特徴を聞いたが、右の目許に泣黒子があり、咽喉には小さい掠れ負傷の痕跡がある。左手の甲に一寸ばかりの切り傷がある。然し咽喉の負傷も左の手の甲の負傷も氣を付けてよくみないと分らない——と女將は説明した。

既早もごうしてもおきんに會あふ事は出來できまい——は私わたしは決定きめて終しまつたやうになると氣きが輕かろくなつた。元々もともと只千ちちやんが戀こひの奴やつことなつてゐるから多少手應たせうてへのある女をんなだらう……と思おもつただけなので、米屋こめや町の仕事しごとが忙いそがしくなる程ほどいつか腫物できものの膏藥かうやくでもはがしてゆくやうに跡方あとがたも無なく心こころから立たち消きえていつた。

天災相場

所謂いはゆるくも雲くもを買かつたり、雨あめを賣うつたりする天災相場てんさいさうばが始はじまつて人ひとの心こころも忙いそがはしく過敏くわびんになつて、電流でんりうを通つうじたる針線はりかねのやうに銳敏えいびん感かん

能のうする。

秋風あきかぜが立たち初はじめた。

二百十日ひゃくじゅうにちも、二百二十日ひゃくにじゅうにちも、其前後そのぜんごも無事ぶじでなかつた。今いままで雲くももなかつた空そらはいつか搔かき曇くもつてポツポツやつて來きたりした。雲行くもゆきが早はやかつた。さうしてドウドウと音おとを立てて雨あめがすべてものをながすやうに降ふり出だした。

毎まい日の天候てんこう不良ふりやうで觸か殻がら町ちやうは芋いもを揉もむやうな騒さわぎをしてゐる。取とり分わけて本場ほんばのときは合百がふひゃくの駆引かひき戰せんで店みせの員もは油汗あぶらあせがニチャ／＼と襦じゆ袢たんをよごす程ほど苦くるしむ。さうして二百十日ひゃくじゅうにち前後ぜんごの暴風雨ほうふううは暴騰ぼうたうまた暴騰ぼうたうとなり、賣方うりかたがあせる程ほど買方かひかたは利喰りくひしては買かひ煽あそつた。

恚う云ふ紛糾まぎれに乗じて私は千五百ばかりの金を儲けた。
 新栗の金團が出る頃となると思ふと、いつか國技館に菊人形が人
 を待つ頃となつた。

さうしたと思ふと松茸の茶碗蒸しが食膳に上り、秋刀魚の焼き立
 てが食慾をそゝる匂ひを齎らして舌鼓を打たせる。時雨が降り出し
 た。紅葉は血を染めたやうに悲しく美しく人目を待つてゐた。此秋
 以來頭を使ひ過ぎたやうに思はれ妙に身體が疲れた。三時の大引に
 なるとヤレヤレと思ふ。帳簿を整理すると捨てられた犬のやうにス
 タスタ家へ歸るやうになつた。家に歸つて錢湯へゆき丹前でも引掛
 けて終ふと長火鉢の横にゴロつと轉がりたくなる。「これではいけな

い。まつたく疲れてゐるんだ」と考へて終うと耐らなくなつて店の
 旦那に二週間の休暇を貰つて一人で日光行ときめた。上野を出發す
 る朝は秋さめが悲しくツタツタ降つてゐた。工場の汽笛が寂しく雨
 空を衝いて長く鳴つてゐた。暗い心持で一人旅の旅程に上つた。

日光へ、中禪寺湖々畔へ

修學旅行の季節なので三等車へ乗る中學生が夥しかつた。二等
 も満員と思はれてギッシリしてゐた。私は二等の切符を買つて入つ
 たがザワザワしてゐるので他の二等へ入るとそこは子供がウヨウヨ

してゐた。私は一等に乗り換えた。そこは五十近い老人とその娘かと思はれるやうな女が乗つてゐた。それつきりで外に誰も乗つてゐなかつた。私は隅の方に寝ころんでウキスキイの懐中壘を取り出して飲み、軽い毛布をかけて睡眠を取らうとした。いつか夢路を辿つて終つた。私が再び目を醒したときには老人とその娘らしい女が見えなかつた。

宇都宮で汽車を乗換えた。今までの汽車は青森行なのであつた。宇都宮から一等には西洋人夫婦が二組乗つたし上野驛以來一寸顔を合した老人とその娘らしい女とが乗り合はしてゐた。私は囁びしい西洋人の夫婦に僻易して、ダンヌンツキオの英文小説ゼ、トライア

ンフ、ラブ、デツス(死の勝利)を取り出して読み出した。そのうちに不圖老人とその娘らしい女を詳はしく見詰める事が出来た。

老人は五十に手が届こうとしてゐる品のいゝ、さうして白髪頭の見から華族か、物持とも思はれた。女は束髪に取り上げて被布を着て何々婦人とも言ひたいのである。ふと目許の泣き黒子が目にうつつて来た。顔は涼しい面長の立ちであるが、眉から目にかけて神経的なせせまこしいイライラしい様子をする。これはよく大きい逆境に立つた人や、身を危くするやうな不幸福に出會つた人が堪へず脅迫観念に犯されてゐてまだ心の沈まらむ特長である。また何か犯罪を行つた事があり、それが爲め苛酷な責に逢つたとか、ま

だ犯罪が曝露しないで心に苦悶を感じてゐる人の顔面神経が脳裡の心理的發作から影響して表現される——と云ふ話を心理学を専門に研究してゐる某教授から聞いた事がある。何心なく恚んな事を思つてみた。米屋町などにも恚う云ふ人は全く多い——それこそ家倉や地所、株券を擔保にして一擲千金と云ふことをやる、それらが失敗した顔の色の悪さ加減はないのである。一種云ひ條ない憂鬱な暗い色を現はしてゐる。——そんなことはどうでもいい。私にはそんなことは眞實のところを知る筈がないんだから。林檎を銀のナイフで剥いてゐる。赤い皮が面白いやうに剥けてゆく。その左の手の甲には切り傷がある。切り傷と泣き黒子——なんだかそんなものを持

つてゐる女の話聞いた事がある。思ひ出さうとした。思ひ出さうとして思ひ出したのは濱町の高等内侍のおきんである。それに違くないと考へて終つた。何故なれば咽喉の濃い白粉の蔭には切り傷らしいものもみえる。

私がどうしても逢ふ事が出来なかつたおきん——そのおきんに違いない。私はさう思ふと新たらしい感興が炭酸水の沸騰するやうな降りそゞぎ方を持つて心の中に満ち満ちて來た。なんだか笑顔を二人の中に交換したい心持にもなつて來る。幾年か幾月だか知らないが前に逢つたやうな氣持になつて來る。然しそれは幻想——だ、彼女は何にも知らないのだ。未知の他人だ、で彼女は私をなんとも

思つてゐないんだ。私一人で小細工してゐるんだ——恚う思ふと慄然として無限の寂寥を覺えた。

彼女が剥き終つた林檎を銀の皿に載せて小さいナイフで切り取りながら老人は食べてゐる。彼女は第二の林檎を剥いてゐる。して汽車は行先も分らぬやうにけたたましく走つてゐる——。

|| 紅葉を見に ||

——私は或る興味に引かされた。若し此二人が中禪寺でも、日光町へでも泊るところ、自分も追跡したい心持になつた。さう云ふ興

味を覺えると耐らなく感興が湧いてくる。

「失禮でございませすが日光方面へいらつしやるのでございませうか」と私は思ひ切つて老人にたづねた。

「はあ左様で——あなたも」

「へえ——紅葉でも見に参ろうかと存じまして」

恚うした調子で老人の宿る旅館も分つた。

老人も淫賣風情の手管に乗つて日光くんだりへ出かける好色の爺さんであるが、此方も一等に乗る人だからさまで悪い男とも思はないで心よく話しかけ老人と女とは若い男と若い女との間でもなく親父と娘位に違つた年齢であるからさう甘つたるい言葉も興味あらう

筈なく、また車中には言葉の通じない西洋人ばかり乗り込んでゐるのだから寂しさを感じてか、此方が勢よく話しかけるに連れてお爺さんも話しかけるのである。さうして例のおきんさんに林檎を剥かして私に「失禮ですが」と出したり、麥酒を抜いたりしてコップを差し出したりした。私はおきんの酌で林檎を撮んだり麥酒のコップを乾したりした。

私は思はぬところで——おきんにも逢つたり、おきんのお酌を受けたり、おきんの剥いた林檎を食べたりすることを内心、こゝろよい笑ひを禁せざるを得なかつた。しかしおきんだけは慎まやかに兩手を膝の上に合せて爺さんと私の「話」を上品な笑ひ方をしながら聞

いてゐた。此爺さんは此女が濱町に居たとき買ったものか、それともどう云ふ機會で此女を得たのか、無論爺さんは私が此女の暗い半面を知つてゐるとは思つてゐない。さうして鹿爪らしく、政治を論じたり、内外の軍事を語り、財政經濟を説いてゐる。——私は「自分」は米屋町にゐると云ふ事は否定して、決して米屋町の事は口にしなかつた。汽車は悠うした興味のある車内の戲畫を乗せて、今市驛から日光驛へと到着した。

——小西の本店と別館へ——

老人はおきんを連れて小西の別館に宿つた。さうして明日中禪寺湖畔のA旅館へ泊るさうである。私は停車場で別れて小西本店に宿つた。私は明日やつぱりA旅館へ泊ろうと考へた。

さうして其晩早く寝たがいろんな幻想が頭に上つて来てなかく寝つかれなかつた。うとうとしてゐると女中が上つて来た。

(別館にお泊りのお客様からで、今日日光へくる汽車の中で御一所になつた女の方から、ホンのコレは食後の腹こなしに召上つて下さいと云つて果物の籠を届けて来た。さうして筆蹟鮮やかに半紙に認めて

今日汽車中では失禮申上候ほんのお慰みまで粗菓御届致し候間御

賞美被下度候 かしく

夏目せい子

と極く簡単に男みたいな文句で終りのかしくがおかしくなる程である。

追伸としてあつて

あなたさまも中禪寺へいらつしやる由でございませすが私どもも左様でございませ。私たちはA旅館へ宿るのではございませせん。汽車で老人がさう申したのは嘘で、金谷ホテルへ滞在するので。す。さうかお暇があつたらお遊びにいらつしやつて下さいませ。只今水菓子少々お目にかけますがこれは老人に内所なのでござ

いますからそのおつもりでお願い致します。

と小さく書いてある。

私は菓物の籠の蓋を取るとそこから小さい婦人用のネエム、カア
ドが出て来た。

麴町區永田町二丁目〇〇番地

と住所も認めてあつて「夏目せい」とある。

裏を見ると（御歸京の節はお立ち寄り下さい）とある。私はなか
く大膽な女であると思つた。是れでこそ「貴婦人おきん」だ。

床の上に起き上つて、是等の半紙に書いた口上書や、名刺や、菓
物を前にして考へたのであるが——彼女は私が一等に乗る男として

またダイヤの指環と眞珠の指環を左の指に、右には刻印の金指環を
嵌めてゐるのと金時計、金縁目鏡に結城紬の上着にお召を下にした
扮装をしてゐる男として、コレはいゝ食物だ。ソレニ爺さんの政治
談や國防論、財政經濟の講義を「ハイ、ハイ」と相槌打つて聞いてゐ
るお目出度い男だ。

恁んなお目出度い人を相手にするのは貴婦人おきんの妾に取つて
はなんでもないのだ。

現在恁うやつて日光へ喰え込んでゐる白髪爺だつて妾がドロシ
て終へばそれつきりなのだ。肘鐵砲を喰はすか、喰はさないか妾の
胸三寸さ。あのお目出度い若いオツチヨコチヨイを一つ蕩し込んで

やらうかい……とでも思つて恁んな水菓子を送つたりして芝居をやるのだらう。

私はどうしたらいいかと考へた。してさまさまの想像に疲れた。

私がおきん事夏目せいともう老人の目を忍んで秘密のたのしみに耽つてゐるやうな未來の場面まで考へた。

しかし自分はおきんに對して、どう云ふ芝居を打つたらいいであらうか。

現在のおきんは——自分が米屋町の仲買店の小僧輩である事は知つてゐない。知つてゐないからこそ彼女も色仕掛でやつてくるのである。それぢやあどうしたらいいであらうか。いつか破綻が来る。

カタストロフ（不幸な終末）がやつてくる。然し彼女も無垢の處女が墮落書生や不良青年に欺かれて、極端なる失望と悔恨を甘い初戀の後に味ふのとは全く違つて、悪女が、不良女子が悪計奸略を持つて、弱い男を誘惑してくるのだ。

「そこに何等の苦悶があらう。道德的苦悶があらうか。良心の反省の囁きがあらうか」さうして

「ころがるどころまでころがれ！」

と心に叫んだ。さうして高島屋市川左團次流の會心の哄笑を、アハハハと白い齒をむき出してやつてみたかつた——が間もなく再び寢床に就いて自分は太谷川のながれの水音で遠い未知の國へ旅立つた

やうな寂寥と孤獨の感を持たずには居れなかつた。

さうして「明日は明日である」と心に念押ししながら「考へる」より「眠ろう」とした。けれど思ひがけない處で思ひがけないことがあつたものだ。と云ふ事はどうしても否む譯にはゆかない。人間と人間の關係は微妙なものである」と極くクダラナイ眞理を尤もらしく感じたりした。——いつかあまい睡眠が撫で、ゆくやうに肉體と魂の上を押つ被さつて來た。

|| 湖畔に立つて ||

日光から馬返し。馬返しから中禪寺湖畔のA旅館へ。

湖畔には中學校の修學旅行とみえて中學生がウロウロ雑沓した。

私だけはA旅館を出てそれらの群れから遠ざかつてポンヤリ湖の面を見詰めたり、カラ／＼と落葉が鳴る林の聲を聞いたりした。白いさうして光つた雲の多い日で弱い太陽の光線は、ながるゝやうに湖の上にさして來たり、また暗くなつたりした。——秋らしい寂しさがどこからともなく聞えてくるやうであつた。白い小さい犬が尾を振つて落葉をカラ／＼と踏み鳴らしながらやつてきた。さうしてク／＼自分の邊りを鼻を鳴らしながら歩いた。さうして利巧さうな目を見張り首を曲げて自分の顔を見詰めながらバタ／＼尾を振つて

ゐたが自分が手出しをしないものだから其儘ヨタクと落葉を踏み鳴らしながら彼方へ歩いて行つた。

私は「生きてゐるものの姿はすべてのものを通して寂しいものだ」と思つた。

「寂しい、實に寂しい」

「さうして自分は更に寂しいものである」

地上に長い細い己が身の影を引きながら「戦場ヶ原へでもゆつてみやうかい」

私はその日の午後——金谷ホテルへ問ひ合してみたが、老人とお

きんはまだ見えないと云ふことであつた。それから夜になつて金谷ホテルへまた問ひ合した。やつぱり来ないと云ふ事であつた。なんだか興味を殺がれたやうな氣にもなつた。また恁んな事に頭を使つてゐる自分を淺間敷しく感じた。

さうして心に思つた——今私はおきんを求めてゐる。他人が自由にしてゐる女を求めてゐる。それがどれだけの意義をもたらすであらう——餘りに遊戯的ではないか知ら。

なせ私をしてたゞ花柳社會の中を金魚のやうに尾を振つて泳ぐ事のみがうれしいのか——なせ私をして純粹な戀愛を遂げさして呉れないかしら。

私が米屋町の仲買店々員風情で下賤であると云ふのかしら。私は中學校を終へてゐる。私立ながらの大學を半途まで——三年だけ學んでゐる。いや、戀愛と云ふものにはそんなものに没交渉である。ブリキ屋の小僧にでも、魚屋の小僧にでも純粹な戀愛を成立する事が出来やうと思ふ。私には心持が腐つて濁つて處女の純粹な戀を容れる雅量がないんだ。幾度か親類などから結婚を勧められた。然し私は何故か避けてゐた。

今日のやうな情けない、さうしてたゞ浮薄なこゝろもちを以て賣女の色仕掛などを今更のやうに難有がつたり面白かつたりしてゐるのはあんまり悲しい事實ではないか知ら。葎町の小染に關係したと

きも恚んな煩悶でやつぱり苦められた。そのときは福井樓——矢の福の或る部屋で小染のくるのを待つてゐた。朝、米屋町の店で帳付していろがしいとき小染から電話が二度もかゝつたので私は三時に場が引けてから矢の福に待つてゐるから——と返事した。三時すぎには矢の福で小染を待つてゐた。然し四時になつても五時になつても小染が來なかつた。

私はどんよりして曇つた——今にもさざめ雪でも降つて來さうな空合の下に、暗く悲しく流れてゐる「すみだ川」の川波をいつまでも見詰めてゐた。小染はお座敷から箱根へお客と遠出したと矢の福の女中は小染の家からの口上を私に取次いだ。私は「さうか、さうか」

と口には云つたもののいやないやなきがした。小染が——私の知らない男と一所に箱根の湯に浸かつて笑ひ興じてゐる軽薄な姿を思ひ浮べずには居られなかつた。

おきんを待つ心持は小染以上にくだらない。

私は此時今更のやうに——私も生甲斐のない、くだらない男だ。小さい人間だ。恚んな事してゐる中に人間五十年を醉生夢死して終ふのだらう……と悲しい事にも、喜ばしい事にも動搖しない中禪寺湖の湖心の方に目を注ぎながら立ち盡してゐたのだつた。

|| 自分と云ふものは ||

私は家の事情で私立大學を三年まで通つたのを退いて、あの無智な群れの米屋町へ入つた。私のこゝろから何時か名譽と云ふものと、地位と云ふものと、外聞と云ふものが失はれてゐた。友情と云ふものも朝霧のやうに消えてゐた。醜くい黄金の奴隸となつて黄金の糞を垂れるやうな男となつて終つてゐた。心はさう云ふやうに變つて終つた。手に残つたものはなんであらうなんにもないものである。醜くい疲勞と懊惱とが醜い努力のあとに残つてゐただけである。四

千圓と云ふ金が残つてゐるがそんなものは二三度米相場へ手を出して終へば譯もなく消える。死んだ親から譲られた家作が三軒ばかりと株券と公債が合せて三千圓斗りある。若し私が自分が儲けた四千圓も米相場へ出して賣るなり買ふなりして若し失敗したらば親譲りの家作や公債株券までつぎこむであらう——まあそんな事はどうでもいいとして、私はも少し考へて、も少し反省しながら世の中を送りたいものだ。

さうしても少し眞實な態度で世の中を見たり、も少し眞剣な態度で人に接せねばならない——今日までは僅か四千圓と云ふ金のため心の目が盲目にされて只黄金とばかりに醜い努力をつづけすぎた。

もう自分の生活態度を轉化しなければならぬ。もつと正しい、さうしてより純朴な、より自分の心に適つた道が発見されたら、その道を歩まう。

晩飯を終つてから——金谷ホテルへ彼女の在否を聞き合すと、おきんは老人と到着したさうである。

翌くる朝——私は金谷ホテルへ出かけた。私は考人の隙をみて彼女に渡して呉れと一通の手紙をホテルのものに渡した。ホテルのもの少し待つて下さいと云つた。私は歸らうとしたが少し待つてゐると手帳を破つて書いた紙切を受取つた。

連れの人とはあと三日此處に滞在して歸京します。
 あなたが二週間御滞在の由なれば妾は一度東京へ戻りましてか
 らまた参りますからそれまでA旅館にお待ち下さいまし。急ぎ
 用事まで。

せい

随分亂暴な滅茶な手紙であるが急いで書いたためだらう。私は紙
 入の中に大切に折つて收めてA旅館へ歸つた。世の中には恚う云ふ
 簡単な手取早い男女交際の方法が澤山あるだらうか。假令相手は賣
 笑婦であるにしても。私は微笑まずには居られなかつた。

どう云ふ態度でおきんに接しやうとしやうか——是だけが最後の
 解決を促すべく私の手に残つた。

昨日と云ふ日を送ると今日と云ふ日がやつてくる。さうして明日
 を迎へやうとしてゐる。

早くも夏目せい——おきんがA旅館にたづねて来るその日が来て
 終つた。

その日に私は次の電報を受取つた——。

アスアサソノチニツク

其地とは日光であるか、中禪寺湖であるのか判断に苦んだ。さう
 して女中を呼んで恚う云ふ人がたづねたら此宿に待たして置いて呉
 れ、私は湯本に行つてゐるから、その女が着いたら迎ひに来て呉れ
 と頼んだのである。日光の停車場くんだりまで中禪寺湖から出かけ

るには餘りに鼻の下が長いやうに自分は考へたし、A旅館へボンヤリ首をのばして待つてゐるのは氣が利かなすぎると思つたから。

|| 金鶴香水の匂ひが ||

湯本の旅館に泊つた朝の十一時にA旅館から使ひが来て東京からお客様が見えられたと云ふのである。

私は慙うやつて湯本から中禪寺湖のA旅館へ歸つた。私はこんなことがあつてもおきんと肉體上の關係を神かけて結ばぬ事を心に念じながら……それは私の試みを始めたいからである。

私は彼女が白々しく……始めてお目にかゝります。私もゆつくり日光へ逗留しやうと思つて……なご、長科白を始めない内に、實は私はお前さんを演町でお目にかゝつてゐるんだ。お前さんが林檎を剥いて恭しく私に出したときはおかしかつたよ。今度小西へ泊つたときお前さんから水菓子を送つて貰つて猶吹き出したよ。私は實は米屋町の小僧だせ——と慙う遠慮なく疊みかけて喋べつたのである。

水のしたゝるやうに美はしい氣高い丸鬚と金鶴香水の香の高い羅衣と金欄の帯とダイヤの指環と蟲の殺さぬ可愛い、さうして涼しい面と夏瘦した楚々とした姿とで思ふ存分私を有頂天たらしめる前に

彼女は既に彼女自らの心を轉倒さして終つた。

その青ざめて終つた顔。

顫えてゐる指先。

おきんは私に言葉をもかけ得られなくなつたのである。

「それぢやあお主は妾を知つてゐたのかい。さう化の皮が現はれちやあ憊うしてゐられねえ。えゝ窮屈だつた」などゝ大見得を切らない内に私はおきんに寄り添つておきんの肩を軽くいたはりながら「ごうだい——おきん。世の中は狭いもんだらうつてな古い科白はごうだつていゝや。ものは相談だがお前には養つてやる親があるのかい」

「いゝゝ。妾一人で憊んな事をして——」

「さうか。ごうだい——おれの鼻になる氣はないかい——ようく考へて貰ひたい。始めて今日逢つたお前さんにそんなこと云ふのもおかしいと思ふかも知れねえが、ごうせお前さんは今日は俺を客に取つて金をふんだくろうと東京くんだりからやつて来たんぢやあないか。考へてみて呉れ。すぐ返事しろとは云はない。お前さんを私は救ひたいんだ。お前さんは諾と云ひやあ、假親もつくるし、まあ第一結納を交はし、ちやんと婚禮の式をあげるんだ。籍も入れやうぢやないか。丁度いゝ所た米屋町の小僧など廢して堅氣な洋物化粧品屋でも開かう、幸ひ叔父がそれをやつてゐるから商法を教へて貰つ

てだ。まあそれもお前さんがいやだと云ふなら仕方がない。ひと晩でもふた晩でもいゝや——なんなら一ヶ月先でも一ヶ年先でもいゝやよく考へてみて呉れ——だがいやだつたら遠慮なくいやと云つてお呉れ。私はお前さんをよく知らないが汽車の中の有様やまた恚うやつて悪い事だか男を操つてゆく腕に感心して終つた。まあそんなことは此方の話だ」

凝つとおきんは聞いてゐたが芝居の狂言をするつもりでの空涙だか知らないが其儘そこに突俯してよよごばかりにハンケチをぬらして泣き出した。肩先や頸や髪の毛が揺れながら……。
私は黙つて女が泣いてゐるのを心持愉快に聞き取り見取つてゐた

暫くしておきんは涙をハンケチで拭ひ

「あなたのやうなお方には始めておめにかゝりました。あなたのお心持はよく分りました。すぐ御返事申し上げるばかりに妾は決心して居りますがそれではあんまり軽卒だと思はれますから、どうぞ御返答まで一週間の時間を與へて下さいまし——必ず御返事致しますから」

と云つたのであつた——而も涙にしめり勝で。

「いゝですとも、いゝですとも、人生の大事ですから。」

「ちやあ、さつぱりと今日はお別れ致します」

「いゝちやありませんか。どうぞです綺麗さつぱりと交際ながら紅葉

下も見てゆきませう」

「左様でございますか——あなたさへお宜しかつたらば」

「え、ようござんすとも——それよりあなたが私を誘惑した動機を考へて御覽なさい。今までは良心が眠つてゐたのですねえ」

「もうごうか——お許し下さいまし」

「ぢやあ、もう今後決して過古のあなたの仕業に就いて口に致しま
すまい」

その日は私とおきんとは一つの部屋で雑談したり、笑つたり、二
つの膳を並べて飯を食つたりした。極く親しい幼な馴染の友のやう
な態度で——

次の日は湯本へ行つた。さうして宿つた。

その次の日は歸京の途に就いた。

恁うして清い交際で二人は上野驛で別れて終つた。

—— 第一歩 ——

私はおきんが改心しないならばおきんはごうでもいゝ、嫁に来て
貰はなくつても關はない。女房なんかごうでもなるのだから——と
おきんの事を捨て置いてまた洋物化粧品屋の開業に忙そがしい或る
日の夜のことであつたが——おきんは束髪に結つて、おきんの叔父

であると名乗る人と一所にやつて来た。叔父は××の役所に勤めてゐると名乗つてから

「實は此女もさんざん叔父を泣かせて今日と云ふ今日まで家に寄せつけなかつたのですが今度堅氣になつて改心するからそれについてはあなたの御厄介になりたいし、正當な結婚を履行して嫁ぐ決心だから親とも媒介人ともなつて呉れとの事であつたからどうか宜しく頼む」と云つたやうな意味をくゞくゞと述べた。

さうして私は木綿着物に安い帯を締め、指環さへ嵌めてゐないおさんの恰好を殊勝に思ひ、おとなしい束髪も氣に入つて終つた。私はおきんを救ふために結婚を承諾した。私は近い中に華燭の典

を擧げやうと誓つた。衣裳其他何にも無用であると私は附け加へた。おとなしくやつて来たおきんはおとなしく歸つて行つた。叔父に伴はれて――

恚うやつて私は「愈々第一歩に立つたな」と感じたのである。

さうだ、第一歩である。

凡ての意味での第一歩だ――と心に叫びながら、

妾たちの生活

— 浅草千束町 —

|| 観音さまのうしろで ||

あたし達は、東京市の各区のうちでも、塵埃溜と云はれてゐる下等な浅草區、其處でまた女として、また人間として、またとない一番賤しい事として其日其日の稼業をしてゐる「白首」「淫賣婦」「賣女」「醜業婦」「不良女子」「私娼」と名付けられてゐる人々でございませぬ。

す。いや人間でなく畜生の眞似をしてゐるから畜生の群れでございませぬ。

而も観音さまのうしろで——観音さまは女體であらせらると云ふ事で「女菩薩」と云はれて誠に尊い佛様で、あの観音經と云ふ御經を拜見しても分ることで、尤も妾は妙法蓮華經觀音菩薩普門品第二十五と云ふ經典の外には観音さまを研究したことはございませぬ。女に取りましてもは女人の理想、女人の圓滿美とも考へらるあの容姿端麗の女菩薩觀音様の後で惡業をしてゐるんですもの。

前世の因果か、輪廻の車か存じませんか、折角菩提心を起し、廻向をなすべき娑婆に生れ乍ら、地獄、餓鬼、畜生の三道に住むやう

な真似をしてゐる上からは吃度來世は阿熱地獄か、阿寒地獄か、兎も角不間地獄（堪間なく地獄の羅卒に責め苛まれる最悪の地獄）あたりへ叩き込まれるでございませう。

象潟署のお取締の下で

もうすこし「妾達の生活」をお話すれば、淺草象潟署のお取締の下で酪酒店雇女として

「ちよいと、御容姿のいいお方」

「揚り花召し上つていらつしやいな」

と云つたやうな言葉を口にしたながら婦女庭訓、女今川、女大學のどの頁にも書かれてゐない行爲と言葉遣ひをして、行末頼母しからぬ、前途の目的の無い——例令へば敷島かパットの煙のやうな、今日だけの主義で明日は野となれ、山となれと云ふ調子で露命をつないでゐる譯なのですが、氣樂と云へばまたそれつきりでございませうが、つくづく人間に生れて、生き甲斐ある人生を送りたいと思ふ時があります。全く賢母となつて子供を教育し將來國家に有爲な人物を仕上げる樂しみもなければ、良妻となつて一家を處理し最愛の夫をして何等の後顧の憂ひなく社會生存競争の巷に戦はず、内政の樂しみもございませぬ。

——夢は何處に宿るらん——

流行唄の文句に

籬に咲いたる朝顔の

露の干ぬ間にすやすやと

夢は何處を宿るらん

とまる胡蝶が怨めしい。

と云ふのがございます。

味のある唄で、妾達の生活振を歌つてゐるやうな氣が致します。

——代表的私娼窟の中の一人——

私娼と云つても田舎の小料理屋、汁粉屋、蕎麥屋などに住家を構えてゐるものもありますし、何しろ、餌を獵る熊の唸り聲が雪嵐の夜に物凄く、あの北海道の果てから、また椰子の葉蔭に雨後の夕風涼しい臺灣の隅まで、妾達と同じ渡世をして居らぬ地と云ふものは恐らくはございませぬまい。

しかし日本の首府の「大東京！」。人口三百萬を收容する「大東京」のその一廓なる淺草公園を中心として附近一帯に巢を構えてゐる、

千束町と呼ぶ、観音裏と名づける、十二階下と云はれてゐる私娼の王国ほど澤山の私娼を收容してゐる土地も他になければまた私娼のお蔭で飯を食べてゐる人あるため相當に私娼が威力を發揮してゐる土地も他にございません。

で、私娼を二三十から、五十、百圓までの金で縛つて飯を食べてゐる親方とか、女將とか、云ふ連中が自分等の頸の乾上らないため「組合」なるものを組織し、是を互親組合とか何組合とか名づけて、實は「如何にして永久に我等が醜業を繼續し得可きや」云ふやうな恐ろしい事を考へてゐるのでございます。

ああ、妾もそのいまいましたき代表的私娼窟の一人でございます。

——大鐵槌投下さる——

警視廳保安課長丸山鶴吉氏の發案で西久保警視總監閣下の下に都下の私娼窟撲滅の擧を起すや、淺草の區民は區會を開いて決議して云ふのには

「千束町方面に於ける私娼を相手とする小賣商人が即急に是等私娼窟を廢止されては飯の食ひ上げだから、何とか延期出来まいか」
 と。さうして府會か市會あたりへ持ち出さうとしたり、内務省へ嘆願したとかしないとか云ふ噂を耳にしても、千束町から五區六區に

掛けて生息する三千の淫賣また悪い意味に於て偉大なる哉と窃かに薄氣味の悪い笑ひを漏らさずには居られません。

さうして警視廳の私娼窟撲滅案世間に發表されるや、或る論者は「千束町一帯の私娼は目下群娼を爲して居れど、一朝此蜂の巢に似たる銷金窩に向つて、煙硝藥を叩きつけ破壊すれば只蜂の巢そのものは壞れて、蜂は八方に飛散し只徒らに散娼となり、却つて警察官の取締が困難になるのと、一面良家の子女に惡風を感染させる位が關の山なり」

と云つたやうでございました。

|| 私娼を女土工させよ ||

妾は鳥辭がましいことを申すやうですが、如何でせう根本的に「社會のバチルス」たる淫賣婦を、片つ端から召し捕つて、素つ裸とし新たに一定せる官給の衣服を與へて、差し當り東京灣の埋立工事の女工夫として使役し、是等の女工夫の收容所として月島とか新佃島とか云つた餘り東京市民の目障りにならぬ邊僻な不用な地面に市立の一大宿泊所を建設したらごんなものでございませう。

恚うでもしたら自墮落な、横のものを豎にする事も懶うい、買喰

ひと淫賣以外に能のない渠等を幾らか矯正も出来ませう。
 矢鳥揖子さんを名譽會頭に置いて、所長には鎌倉あたりの隠宅で
 身を持ち扱つて、殘骸猶用ふるに足る大浦兼武さんでも引張つて來
 ちやあ……。

——その昔は女郎ごした——

徳川の御代の頃——或る年代には江戸中の隠賣女は悉く召捕つ
 て吉原に投げ入れ、末長く散茶女郎とし、年老ひて遊女勤め出來ざ
 るに於ては鴉母として廓奉公して餘生を送らしたと云ふことでござ

います。

餘談ながらその頃は相對死(心中のこと)をした男女は、仕遂げた
 ものは犬猫同様に菰にくるんで土の中に埋め、仕損じたものは穢多
 村へ渡し、殊に吉原廓内の貸座敷で心中があつたときには、その心
 中した娼妓の持物、道具、屏風、疊、衣服類一切を穢多村へさげ渡
 したと云ふ事でございます。

また廓内の引手茶屋などに居る仲の町藝者などが殿方と一夜の仇
 なさけを結んだことが分れば、その藝者の當夜着た衣物は衣絞竹に
 掛けて釣るして置き、藝者は裸にして大勢で胴上げした上廓から追
 ひ拂つたと云ふことでございます。

——散娼があらはれた——

五月八日に私娼撲滅の新廳令を發布されてから今日まで二箇月以上経ちました。

私娼窟の本場所を取締つてゐる象潟署の報告によりますと七月三十日迄は銘酒店、新聞縦覽所の現在總數八百四十一軒の中で廢業した家と營業停止の處分になつた家が併せて七拾五軒でございます。千束町の私娼の現在總數二千百五十六人の中で、象潟署長の諭示で廢業したものが七百七十六人、それから今度の紛擾に紛れて逃げ

たり、國に歸つたりしたのが三百五十人で、現在の居残りの私娼は壹千名足らずだそうです。

ところで、果たして千束町から消えた壹千人近くの女は全部正業に就いたでせうか。また親元へ歸つたものでございませうか。

成程、五月の二十日でしたか、二十日から三十人斗りづつ白首を午前と午後と二回に呼び出して、佐々木署長から「正業に就くやうにし」勧め、親あるものは親元に引取方を請求させたのでございまして。

親元の方は私娼の三分の一だけ照會をしてみたのですが、その中親元の方で引取方を不承諾の分七十九人。引取つたもの二十一人で

ございました。是れは無論象潟署の調査報告に依るのですが。

さて、浅草の私娼が今日散娼となつて東京の諸方に表れたと新聞は報道してゐるところをみると、やつぱり川育ちは川で果つる習でせうか知ら。近頃温泉場、海水浴場へ出かけて鼻の下の長い先生を釣ろうとしてゐる噂も立ち、私娼が赤ん坊を抱いたり、おんぶしたりして、浅草公園へ子守風に化けて、客を引張ると云ふ事でもあるし、下町でも山の手でも警八の風が吹きさうもない場所に、女髪結とか生花の師匠、遊藝の師匠の看板をかけて、幾人かの女を置いて盛んに風俗を紊亂させてゐると云ふ事で、殊に效外なご邊僻な場所新開地などにはさう云ふイカモノが多いとの事であるのをみても、

イヤハヤ恚う出れば、ああゆくで愈々持つて臭い物に集かる蠅の類で追へごも、追へごも、絶對的に、根本的に蠅そのものを仕末せねば一時の小康で結局ほんどうの撲滅は出来すまい。

|| 白首の親はごんな親か ||

何しろ私娼にでもなつて、世を渡ろうと云ふ了見の人達ですもの拘留や諭示放免では云ふ事聞かず、纖弱い女の腕でさへ、ああやつて淫を賣れば一晩に二三圓の金が出来るのですからいけません。さうして私娼の身許を調べてみれば親元だつて碌なもの居りま

せん。

藝者になる女の親元だつて酷いのが多く車屋の熊さん、八つあんがアマツ子を生むと藝者にして金を儲ける氣である位ですから、白首の親なぞと來ては貧乏にかけては何れ劣らぬやからで、貧民長屋で鰻の串削りとか、ポール箱を貼つてゐるとか、日雇人足とか、馬丁、縁日に出る世間師、大道夜商人、おでんや、下駄の齒入れ、紙屑屋とか碌な親たる事は勿論で、箕の輪、龍泉寺町、萬年町あたりから出てゐる私娼は随分澤山あるさうで、實際今更身體は六百六號を注射して梅毒の第三期で腐りかけ、心は良心の玉をブツ毀はして終つた人達で、親元へ引取つても穀潰しで生業には氣を入れない怠

け者ですから随分仕末の悪いことでせう。

親達も社會のどん底に落ちて、世間の人達から虐げられ、終日刻苦して勞働して得る賃銀なるものは實に僅かでウマイ酒さへ満足に飲めない連中でございます。

この親にしてこの娘ありと云ひたい位です。

|| 多少教育あるのもゐる ||

嘗て象潟署で調べた統計に依ると

素人娘 七分

娼妓上り一分

女工上り一分

酌婦上り五厘

女學生上り五厘

ださうで、女學生あがりの五厘は女學校卒業生と半途で退學した
のと併せて云ふのでせうが、無論是等の女は最初素人の頃に男と關
係して、墮落し始め父兄には見離され學資の道が絶え、遂ひ魔道に
墮ちて終つたのだらうと考へられます。

決して自ら私娼にならうと魔窟に飛び込んだのでない事は明らか
でございます。

さて前記の統計中で素人娘七分と云ふのが一番考へなければなり
ません。此中に高等小學を終つたものもありませうし、裁縫、割烹、
諸藝など相應に收めたものも居る筈で、娼妓上り（一體風説に由ると
新吉原、洲崎等の遊廓で娼妓を勤めてゐたものは年期上りの後、又
は自由廢業の後やはり元の娼賣がやめられないで千束町へ轉げ込
むのが多いと云ふことでした）のものも少なく、酌婦上りも少な
いの素人娘の多いと云ふのは、前記の金杉、箕の輪、萬年町あた
りから繰り込む女が多いため、東京の貧民窟たる萬年町、山伏町
淺草町、三の輪、玉姫町、金杉町、入谷町、豊住町邊の女は例へば
紙選りの仕事をして一日五六錢しかならない、また專賣局か印刷

局きよくの女工ぢよこうをしても十五錢せんから二十七錢せんごまりであるさうでツイ千束せんぞく町まちに身みを入いれると拾圓せんから百圓せんまでの借金しやくきんをする事ことが出来できるので、親達おやたらが病氣びやうきとか、時ときならぬ必要ひつやうの金かねに迫せまつて恚こうやつて素人娘しろうとむすめが身みを賣うるのでございませう。

また女をんなに依よつては身代金みしろきんは二百圓せんも貸かす事ことがあり、一體たいに五十圓せんから百五十圓せんまでの身代金みしろきんの女をんなが多いさうです。

さうして是等これら身代金みしろきん付つきの女をんなは店主てんしゆが六分ぶ、女をんなが四分ぶの勘定かんぢやうで、食料しやくりやうは店主てんしゆが拂はらふのでございませう。

また身代金みしろきんのない女をんなは叩たたき分けわけと申まをしまして半分はんぶん四分ぶんに店主てんしゆと自分じぶんとに儲もつけ高たかを分わけて終しまひます。

御客大明神

143

上じやうは來こずの魔窟まくつで何いれ恚こんなところへ來くる人ひとは自分じぶんの本能ほんのうの満足まんぞくと云いふことが主しゆではございませうが、いつか女をんなに釣つられて「俺おれはあの女をんなが惚ほれてゐるんだ」などの調子てうしでせつせと通かよつて來くる大馬鹿おほはかちやんりんがあつて、是これが自分じぶん一人ひとりモチ様モチやうなぞとツマラナイところへ成なり田屋たや園だん十郎じちやう張はりの大見得おほみえを切きつてザクザクとお金かねを撒まいてお遊あそびにならる方かたもございまして全く是等これらは御客おきやく大明神だいみんじん様さまです。

しかし一體たいがそつと隠かくれて來きて、また人ひとに知しれないやうに遊あそび、さ

うしてこつそり歸つてゆくところが私窩子買の私窩子買らしい所な
 のですから、客一人費す金なるものは五十銭から先づ先づ三圓ごま
 りで、ソリヤ遊び場所ですから、此客が此位持つてゐるなと思へば
 腕に縊をかけて絞れるだけ絞るのでございます。酷いもんです。

只お客様が呼び込みに應じて、揚り花と云つて、番茶の出からし
 を一杯飲むでも御茶代と云つて二十銭取る極道場所、普通御茶代
 は十銭と規定されてゐるのですが十銭では膨れ面ばかりか

「もうあと一貫出して頂戴よう！」

などと請求するのです。

飲食物などは普通の倍と思へば間違ひありませんでせう。

然し夏などは暑いから客は女から氷水を奢つて呉れどかアイスク
 リリイムを買つて呉れどかイキナリ初ツ花からやられます。

これが客の分と女の分だけならば譯は分つてゐるんでございます
 が、下階にゐる出方（銘酒屋、新聞縦覧所の雇女を彼等私娼窟の
 仲間では恚う呼んでゐます）や長火鉢のところにも納つて一家の采配
 を振つてゐる女將や、婆や、女中までにも一杯宛振舞ふてな事に
 なるは是だけで少くとも一圓は消えて終ひます。

普通銘酒屋なぞへ上るお客様は一杯飲まうかどでも考へてゐらつ
 しゃるのも多いのですから、果物にビールとか、彌助にお銚子をあ
 つたかくするとか云ふ工合でビール一本三十銭を請求し、一人前十

二錢位の彌助を三十錢だなどどフンダクルのでございます。

——収入の多い時には——

銘酒屋、新聞縦覧所はお客大明神様の御光來によつて随分澤山な儲けもあるさうで、殊に五區と稱して觀音堂の裏手などは収入の多いところで、例令へばお正月とか、お盆とか云ふ月は、お屠蘇機嫌の松の内、藪入で地獄の釜の蓋が開き、職人、番頭さんなどが押すな押すなの繁昌と云ふ工合で千兩位握るときが多いさうです。六區と云つて活動寫真館の裏手は五百圓位、十二階下や千束町

の一帶の家は三百圓位の収入が盆と正月の月にはあるさうです。

——家賃は大概三十圓以上——

恁う云ふ處ですから家賃は何れも高くつて普通毎日一圓の日掛で月に三十圓拂ふことになつてゐます。

五區六區などになると一圓五十錢の日掛の家もあつて月四十五圓拂ふ勘定になりますし千束町の一番邊僻な、さうして場所の悪い、尙キタナイ家でさへ日掛五十錢で月に十五圓は家賃を出して居ります。

——早く恁んな場所を毀せよ——

最後に妾が告白するのですが、事實恁んな場所は醜怪見るに堪へぬ、猥褻面を蔽はねば通れぬ場所なのですから早くブチ毀はして終ふといいのですが、群娼を撲滅して散娼をつくるやうなのではなんにもなりません。もつと根本的に撲滅しなければ駄目だと再び申上げたい。

眞實に彼等は靈と肉共に腐敗し切つてゐる奴等なんですから——

なさけを賣る女

——何故公娼と私娼と存在するや——

公娼も私娼も性慾の満足を完成させんため存在してゐるに過ぎないとは公娼と私娼の根本義となつてゐる唯一の約束である。

何故公娼を置かねばならぬか——此疑問に逢著しては如何なる時代の如何なる行政的手腕のある役人も頭を悩めたらしい。そこに道

徳上の決濟も考へなければならぬ。社會政策と云ふ事を念頭に第一に置く事より道德的のためである、宗教的のためである。云ふ事が昔の役人には先きに頭を刺戟して何事も先づ此事は道德的意義に觸れまいか、恚うしたら宗教的敬虔に邪魔をしないかと云ふやうに凡ての問題を解決したらしい。

で昔の役人も考へた。公娼を置くこと云ふ事は道德的ぢやない、宗教的ぢやない。然し社會の組織上どうしても公娼を置かねばならぬ。として終つたのである。西洋でも、また我日本でも同様であらうと思ふ。庄司と云ふ吉原遊廓を計畫しさうして建設を家康に建言した男は偉かつたに違ひない。それと同時に庄司の建言を容れた徳川

家康も偉かつたのである。

徳川家康は公娼が道德的でない、宗教的でないと云ふ刺戟を感ずるより是れは江戸に幕府を開く以上參勤交代に國許から江戸に上つて来る武士のため一つの娛樂機關を設ける事が必要だと先づ氣がついたらしい。その娛樂機關と云ふものはどうしても人間が最も痛切に感ずる本能の欲求を満たす事——此處に觸れた機關でなければならぬ。と考へたらう。恚う云ふと或は娛樂機關の娛樂の二字が不妥當かも知れない。

事實、參勤交代に來つて妻を國許に残して置く武士に只性慾の満足させるために吉原遊廓を建設したものとすれば娼妓はその満足

させると云ふ道具にすぎないから白粉を塗ると云ふ事も口紅をつけると云ふ事も不必要である筈である。況んや三味線を弾き遊興を助け唄を歌ひ踊を舞ふ等と云ふ事は中心の或目的を更に誇大的に歡樂とか遊興とか云ふ不自然な、不具なものを以て飾りをつけて遊戯的として本来の意義を失つて終つたやうに思ふ。是は餘談である。

——家康の社會政策——

家康は次に社會政策として娼婦を一團とし一廓中に收めて置く事が必要であると知つた。

さうして江戸市中に娼婦が賣笑をあちらこちらと云ふやうに行つてゐるやうぢやあ一廓に集中された娼婦を衰へさすとも繁昌さすことは出来ないと知つて極力所謂市中に散在してゐる私娼なるもの撲滅を圖つた。

爲めに吉原なるものは一方絶對的專制力を有する時の將軍家なるものの擁護を得てゐるのみならず、吉原の娼業を妨害せんとする私娼をば遠慮なく召し捕り以て幕府の娼婦集中政策を完成せんとするから、どうしても吉原は増長せざるを得ないのである。

幕府が娼業を許しこれを援助するため一方參勤交代の武士も心置きなく吉原通ひをする。盛んに金を吉原に撒く。吉原は金持になる。

金持になるから妓樓も構へを立派にする。従つて美女を置く。家具
 家什も結構となる。武士の遊興を添んとする男藝者、女藝者の類も
 自然に發達して来る。甘い料理も食はすやうになる。種々の設備も
 完成して来る。恂うしてゐる中にいつか吉原は立派なもう動かす可
 からざる基礎を建設して終つたのである。さうして太平が愈々續く
 と此處に全く吉原は交際場裡の中心となつた。戯作者、狂歌、狂句、
 川柳、草双紙等に依つて吉原を讚美し或は吉原の生活を描き、或は
 吉原を舞臺とする。而も醜業の魔窟を歌ひ或は描いても何等天下御
 禁制に觸れなかつた時代なのであつた。凡て市井の文學は江戸時代
 に於て吉原を全く中心としてゐたと云つて過言あるまい。江戸時代

の狂歌から川柳から人情本から、草双紙から、浮世繪から吉原と云
 ふものを全く除去して終つたら何にも残るところないであらうと程
 思はれる。演劇の世話狂言、二番目なるものからも吉原を除去して
 終ふ事はなかなか困難であらう。

|| 身賣は婦徳なり ||

忠と孝と云ふ事が人民のなすべき道徳中に最も重しとせられた國
 民に於ては親の難儀のため病苦のため自分を犠牲にして身を以て黄
 金とし、以て親を救助すると云ふ事は非常な立派な道徳的行爲とし

てゐたのだつた。娘が公娼となつて身代金を困苦の親に渡すと云ふのは婦徳である——恚う考へてゐた時代である。娘が身賣するを拒んで親を見殺しにしたなら不孝奴とした時代である。時の漢學者達が吉原を儒教の思想から仁義禮智信其他を持つてない悪所場だから亡八と唱へて是を忌避してもその言葉には何等の權威も見出す事を出來なかつた程江戸時代の人は吉原と云ふ醜窟を餘りに難有がり、餘りに詩美の情調に酔ひ、また缺く可からざる交際場としたのだつた。そこにゆけば凡ての歡樂も得られる。此上ない現在の極樂淨土である。

日本の近古近代過去三百年は公娼と私娼の一長一短時代でもなけ

れば、私娼全盛の時代でもない。全く公娼中心の時代、公娼全盛の時代であつたのだ。

遮莫江戸へ来て吉原を見ぬものは江戸見物に来て甲斐なものとしてゐた時代である。

所謂田舎者は江戸の見物に来るのか吉原を見物に来るのかと云ふと寧ろ眞實の所を云へば吉原に七分興味を以て三分の興味を江戸見物としたのではあるまいか。従つて明治大正の今日になつても此風習が未だ衰へないので東京見物の裏面には吉原見物乃至吉原登樓が目的であり、吉原は東京名所の一つとして數へられてゐるのだ。

明治になつて歐洲文明が洪水の様に日本國土中を漲つて終つた。

人権——徳川時代には口さへ上らなかつた人権が歐洲文明のお蔭で漸く喧しくなつて来て長い間癡悪なる貪慾なる妓樓の樓主一派の喰ひ物になつてゐた娼妓も人権の束縛から先づ問題となり次いで社會的道德問題の立脚地から云々されて来て漸く盲目的讚美の中に隠されてゐた吉原を眞白晝間の中に曝け出してこれを解剖しなければならなかつたのである。

今迄極端まで鐵槌で頭を叩かれてゐた私娼は漸く頭を持ち上げて来た。

さうして公娼より却つて私娼の方が正當の娼業者らしく思はれ、公娼は全く罪惡化されたと云ふのが明治の思想である。

|| 大正の今日 ||

大正の今日から思へば明治は歐洲文明かぶれの時代であつたのだ。歐洲文明心酔で凡ての傳統的文明、東洋的文明及夫等の思想を破壊するに急がはしかつたのだ。決して其意味からすると健全な時代でなかつたのだ。その代り歐洲文明を巧みに真似、巧みに咀嚼し消化した日本は歐洲先進國と列を伍して遜色ない位置まで熱心に努力した。日清日露の二大戦役は明治時代のシンボル(象徴)であると共に何處まで巧みに歐洲文明を入れて新しい戦術を獨得な頑健な大和魂

を有する日本人が戦ふかの試験臺であつた。さうして北洋艦隊全滅
 或は日本軍が北京に迫ると云ふ事や、ポウトアアサア（旅順）の開城
 奉天の陥落、日本海對島の會戦と云ふ事が動かす能はざる地位に日
 本を引きあげたのであつた。

明治の如き歐洲文明が洪水の如く漲つた時代に於ては公娼は慘膽
 たるものであつた。又妓樓は不當な金銭の要求をなし、高價な拙い
 飯食物を賣り付けて客をして滅茶滅茶に金銭を消費さす全く罪惡の
 かたまり所としてゐた故に時間に於て經濟な、金銭に於ても安價な
 さうして不當な祝儀纏頭の必要のない私娼は大モテであつて千束町
 などが勃然として發展して來て千束町が約三千の私娼を有する大魔

窟となつたなどは全く明治のお蔭である。明治と云ふ歐洲文明、歐
 洲思想の受入萬能時代あつてこそ始めて千束町も一大私娼窟となつ
 たのである。

然し私娼は公娼より目だたなくつていいと云つてゐた明治の行政
 官吏のために發達した私娼も實は私娼を操つてゆく親方と稱する無
 賴漢、女將と名づけられる不良女子の生活を安爲する道具にすぎなか
 つたのである。

私娼——毎夜と云はず毎日と云はず客さへあればその要求に應じ
 て身を犠牲にしてゐた女達は己の勞働に依つて得る報酬は僅かの金
 を貸して以て女達を縛つてゐる女將と云ふものに、親方と云ふもの

のに捧けてゐたのだつた。

それ程まで日本の私娼なるものの群れは無智であつたのだ。

私娼撲滅の本義

大正の今日私娼を撲滅すると云ふ事は寧ろ私娼を撲滅するのでなくして、私娼を飯の材料として、生活のための營業道具として渡世してゐる私娼窟の親方女將をして正業に就かしめんが爲めである。在來の彼等の職業を奪はんがためであると同時に自己の生活を安全に、安爲に營まんがため道德上の禁止區域に入つて、國法が定めて

ゐる網を破つて猥褻な行爲をしてゐる良心麻酔婦人をして覺醒させんためである。社會風教のためなぞと論ずるは第三の問題であらう。第一の目的に社會風教のためとあるなら自分は私娼撲滅などと云ふ困事業より、市内を警視廳の制限疾走力が十哩とあるのを二十哩から二十五哩を出して走つてゐる彼の自動車と稱する化物から取締つて貰ひたい。東京市内五六百の自動車が多々として非自動車道路たる東京に砂塵をあげて三百萬の市民を驚かしてゐるのを。碌に利きもしない砂のやうな賣藥は新聞に掲載せられる誇大の廣告によつて未曾有大發見の神藥の如く良民を驚かして財布をはたかせる。

スツポンを月にするやうな意氣込で述べたつて水のやうな化粧水を賣り、白墨を溶いたやうな白粉を賣つて虚榮を飾る御婦人の嗜好に投じ彼女の可愛い赤い巾著のなげなしの虎の子を奪ひ取る。私に取つては賤民の營業してゐる私娼を撲滅しやうとする事は相も變らず弱い者いぢめの仕事であるまいか。

|| 公娼と私娼の解決 ||

公娼と私娼——此問題は中々解決の出来ない大問題である。私は恐らく永遠に解決出来まいと思ふ。只公娼は政府が權能を以て撲滅

すればそれ丈である。然し私娼に於て永遠性を有してゐる。單に千束町を撲滅する事が「私娼を撲滅しました」と云ふ無由には到底ならない。軍艦が全滅して沈没したから某國の海軍は軍人があつても全滅したと云へやうがそれとこれとは問題が違つてゐる。私娼窟の取ひ拂ひは私娼そのものの取り拂ひになつてはゐない。臭いものは何處かで臭い匂ひを吐いてゐる。

私の思想は斯くの如く公娼と私娼に就いては何等の解決もついてゐないのである。人間の思想などと云ふものが時の政府の方針が恣うだから恣うとかああとかとそのままに變化する様な單純なものではない……。

私娼全滅

— 隱賣女の召捕 —

天保の頃、水野越前守が町奉行となられた折か、日本の北境は露艦頻りに出沒する。將軍家は累年の奢侈贅澤のため、貨幣著しく減じ財政困難となり、下も長き太平の夢に全く包まれ上に似る習ひで、是又奢りに疲れてゐる仕末、市川海老藏が豪奢僭越至極なりと

江戸を追放されしも其頃。爲永春水が戯本書いて手錠を嵌められたのも其頃。田舎源氏を書いた柳亭種彦が國貞と共に白洲にお取調べになろうとしたのもその頃。江戸三座が場末へ移轉を命じられたもその頃。諸事儉約のお觸厳しく、殊に隱賣女はお繩を頂戴し、吉原と云ふ官許の遊女以外、湯女、茶汲女、女髮結、其他隱賣女が行爲なすもの一切お咎めに相成り申して惡所場打ち毀しの騒で、誠に私娼は大恐慌を致しました。

この度の警視廳の御發案の御改革はそれにも似て、否全く同じ遣り口で、昔ならば大江戸八百八町に介在する、今なれば十五區内の私娼窟と云ふ私娼窟が全滅さすと云ふ御方針で、これを社會風教の

爲に至極結構である、賛成であると只今のところ江湖の輿論も警視廳の御方針に一致してゐるやうでございます。

私娼退治とは

その一條には「今までより一層私娼の取締を嚴重にすること」で比較的取締を大目に見てゐたと云つていゝか、それとも刑事の袂へ私娼の親方や女將たちが少なからぬお金を潜らしたから取締が寛大であつたと云つていゝか、どつちとも分りませんが、今後は大正藝妓、濱町の黒縮緬の群れ（高等）日本橋馬喰町は浅草橋橋畔の郡代

の姐さん、芝神明は「め組の喧嘩」の芝居で名高い。ドンドンと矢場の姐さん。浅草は親音裏から十二階下一帯の千束町の「チヨイとチヨイと」客招いた白首の二千五百か三千に垂んとす群——一切この女たちが、客を喰へ込むところや、また遊興をすゝめてゐる折や賣春中や、荷も風俗を亂さんとする様子あると見れば、大喝一聲「コラッ」と踏み込むで、手をついて謝まるのも聞かで遠慮なく襟髪引き取つて私娼たちを引き立てゆく由。

それ故千束町の路次々々——例へは櫻新道とか、浪花新道とか、貝殻横町とかの入口とも思はる個所、曲り角なごへ制服着て鍼力の音のする嚴めしい叔父さんが蛇のやうに目を見張つて警戒をなして

居るのでございます。

そのため、いくら私娼たちが娼賣繁昌と鼠鳴きしても、鹽花を門口に盛り立つて呪禁したところが一向糠に釘と斗り手應へなく只時計のセコンドの刻みゆく音のみ急がはしく、茹で小豆のあつたかいのを賣りに來ても、甘酒屋が來ても小遣錢なければ買ふ事も叶はず、遠慮なく千束町の夜は煎り立て豆やの徒らに威勢のいゝ聲と、魂をそゝるやうな新内のながしとに悲しく、寂しく更けゆいて、窓側にいゝ獲物かなと腕に縊かけて待つ私娼も思はず色消しな欠呻を漏らして

「お女將さん。なにか内職でもしませうか」

と云ふに至つては是れ私娼の旗色傾きしものでございます。それかあらぬか千束町は已でに百六十軒の廢業者を見出し、私娼は五百人以上鑑札を象潟署に返上致して、長い間吳客越人を朝な夕な迎へて、醜聞を洩らした十二階下と云ふところを、千束町と云ふところを後にして他地へと去つたのでございます。

早晚十二階下には狐や狸が出て、ペンペン草が生え、幾多男の血を吸つた人間の狐や狸に代り、男心をそゝつた三味線と交替する事でございませう。

|| 新規はいかぬ ||

此度のお觸れでは「新規の營業出願を絶対に許さず」と云ふ譯で、此處に一人の馬鹿あり。屢々遣り繰つて銘酒屋に遊びにゆき、お馴染の白首が出来たとする。銘酒屋、新聞縦覽所なるものはどの位の収入高がある、どの位の資本があると出来る、玉(女のこ)の仕入方などを聞き噛る、ちやあと云つて五百六圓から小千圓の資本を吐き出して始めやうなどと云ふのは絶対に禁止するとの事でございます。

それちやあ、今まで他人が銘酒屋を經營して稼ぐ女も置いて盛んに營業してゐる店を譲り受けてやつたらばと云ふとそれもいけないのでございます。

|| 營業の讓渡に依る ||

名義の變更許さず ||

今までの銘酒屋、新聞縦覽所を營業する例から見ても、随分此「營業の讓渡に依る名義の變更」と云ふのは多いのでございまして、此處に甲の人があつて銘酒屋を商賣としてゐたございます。

何かの事情で銘酒屋を止めて外の仕事を始めやうとします。そのとき乙と云ふ今度銘酒屋を始めやうとする人に現在のまゝ一切を相當な値段で譲り渡すのでございますが、無論女（現在私娼を営むのである）も附屬して譲り渡すのですが、もう是からは恁んな方法も許さなくなつて終ひました。

で、若し銘酒屋の營業名義人、例へば親方なり、女將なり、その名義人が逃げて終つたとか、病氣で死んで終つた時はどうするでございませうか。又商賣換えした時には？。

|| 前營業主の轉業又は

死亡は廢業と見做す ||

と之ふ條々が今度のお觸れの中にございますから一も二も無く問題は解決つて終ひます。

最早恁うなると人間僅か五十年で、まさか一歳や二歳の赤ん坊を營業名義人として置いた銘酒屋もございませうから早晚十年か二十年か、いやいやもつと早く是等の私娼營業者が影を失ふと云ふのは次のやうな綱目があるからでございませう。

|| 新たに雇女を雇ふ

このことを許さざる事 ||

現在盛業中の店は他人に譲り渡さなくつても、また營業主が死んで終はずとも、肝心の稼いで呉れる私娼が、借金を返して終ふとか身請されて終ふとか、また如何云ふ事情であらうとも一旦娼賣を廢して、素人になつたとすれば、もうその店は一人私娼が減つて終ふことになります。

新らしく玉を仕入れる事が出来ないから、いい玉があつても仕方

がないし、一方雇ひ女が減じて三人が二人となり、二人が一人となつてゆけば、みすみす商賣があつてゆきあやしませんや。何れ廢業でもしなければ損を重ねてゆくやうなものでございます。

|| 雇女の通勤許さず ||

お遊興においでなすつた殿方はおわかりでせうが、よく縦覽所や銘酒屋に丸鬚結つた女や、思ひがけない年増や、或はまた、いつも此家には三人しか私娼が居ないのに今日は見掛ない女が別にゐると云ふ場合がございます。

憊う云ふ場合は屹度その通ひで私娼となつてゐる女で、實際公娼
 あがりか憊うやつてまた店へ来て操を賣つてゐるものもあるし、素人
 の女が亭主が薄給で暮しにお金足らぬとか、娘が親達に貢いでや
 ろうと云ふ心がけから通つてゐるものもありますし、兎も角千差萬別
 で箕の輪、象潟町、新谷町、松葉町、萬年町あたりの貧乏人の家か
 ら、長屋から澤山此通女が出張つてゐるのを厳しく禁めやうと云
 ふ御趣意でございます。

學生生徒の遊興を禁ず

今日千束町二丁目六百七十軒(私娼數千八百人)公園五區六區百六
 十八軒(私娼數四百五十人)の私娼が居ります。實際はもつと私娼
 の數は多いのですが、兎にも角にも是れの私娼の最大需要者と云つ
 たもの、一番大切なお客さまなるものは白狀すれば、書生さんでこ
 ざいます。

一度千束町を探險なすつた方はご存じでございませうが實に書生
 さんの數の多いのにも驚きますので制服制帽で學校包みを持つて女
 にからかつてゐる方もあるし、袴で正帽の方もあり、着ながしの方
 あり、どうみても書生さんに違いない方々が非常なもので、餘りに
 簡易な、餘りに高價ならざる千束町の女は最も書生方に適し、一寸

公園で活動寫眞みて来たよ」つてな時間で、充分暗中飛躍が試みられ得ます。

遮莫。こんどの私娼撲滅方法では一方醜業者の廢止も肝要なれど、一方溜々として墮落し千束町二丁目を横行する書生さん即ち學生及び生徒の遊興を禁ずるのが又主目となつて居るやうでございませぬ。

學生とは大學生(官私立の大學生)及び専門學校程度以上の官私學校の書生さん。生徒とは官私中學校の生徒さんを指すのでせうと思ひます。

藝妓類似の行爲、戸の開放、

通行人に對し誘惑す事禁ず

藝妓類似の行爲——ツマリ撥を取つてチチン、テンと粹な音締でお三味線と云ふ工合で御遊興を助成さすることですなえ。また踊をする事も藝者の眞似でせう。この事は以前からお上から差止られてあり、今日事新しいお觸れではございませぬ。早い話が銘酒屋、縦覽所で三味などの弾いてゐるのをお聞きになつた方はございませぬ。僅かな其家の娘さん達が、女の嗜みで御師匠さんで習つて来た

藝事をお復習してゐるのを耳になさる位なものでございませう。

開き戸をあけて置かぬこと。

成程これは確かにどの家でも開いてゐた家が多いと思ひました。

まつたく殿方でも、戸が開いてゐるとゐないことで、餘つ程這入り工合が違いますから。これも御遊興をそゝらないことに於ては、手應へあるお觸れの一つでございませう。

通行人に對する誘惑を一切禁ずること。

これは今まで殿方がお通りになると女達は鼠鳴きをして注意を引いたり、また

「ちよいと、ちよいと。御容子のいゝお方。」

「ちよいと。親方さん。」

「眼鏡の旦那。」

千差萬別の通行人呼込言葉がございまして、あの「天民式」と云ふ造語さへ出来てゐて名高い社會探訪記者の松崎天民さんの「淪落の女」と云ふ本の「十二階下」と題する一篇の中には、あの麥酒樽みたいに肥つてゐる天民さんが千束町を通ると慥んなにも澤山な呼び方をすると一つ一つ詳しく天民さんに對する呼び方が書いてありました。今後殿方がお通りになつても黙つて睨めつゝする外はございませぬ。

況んや戶外へ飛び出して殿方を引つ張り込むに於てや。

西久保警視總監の指揮の下に企てられた私娼退治案は斯くの如くして、帝都の代表的大私娼窟淺草千束町を始め、日本橋郡代、芝神明、の歴史ある矢場、銘酒店等を筆頭に、新開地の澁谷道玄坂、麻布笄町、三輪新開地、小石川指ヶ谷町、大塚附近、根津八重垣町、龜井戸遊園地、向島遊園地、谷中初音町、小石川砲兵工廠附近、兩國回向院附近、下谷七軒町、先づ先づ恚う云つた魔窟が、片つ端から今度のお觸れの許にデリ／＼首を締め付けるやうにして全滅さして終ふのでございます。

長い間我國に恚う云ふ公然の秘密境が存在してゐた事も不自然でしたが、僅か五十か百にも足らぬ金を以て、あたから人間一匹を縛りつけて醜業を營んで座食した、親方などが今度こそは目が覺めて、多年不義の暖たかい古巢を捨て、何か食ふ道を考へなければ渡世が出来ないと聞いてはまた痛快な因果應報ではございませんか。

恚うやつて貸座敷擬ひの銷金窟が減びる。

恚うやつて嘗て明治四十四年の吉原大火を手を打つて喜んだ東京市内二千軒に近き銘酒屋、新聞縦覧所、碁會所の約一萬人の雇女は、多年不景氣のドン底に呻吟てゐた吉原、洲崎遊廓の大隆盛を外目にして今は滅んでゆく……嗚呼。

大正五年九月十二日印刷
大正五年九月十五日發行

なさけを賣る女
實價金二十五錢

不許複製

著者

糸春水

發行

東京市牛込區白銀町二十九番地渡部朔邸内
渡邊秀一

印刷者

東京市麴町區飯田町二ノ六八
成田滿

印刷所

東京市麴町區飯田町二ノ六八
公木社

發行所

東京市牛込區赤城元町二十二番地
近松書店